



福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since2008.4 2024.05.17

## 教師とはいかなる専門職か

福井大学理事・副学長 松木 健一

初年度の開始にあたり、これからの教師の学びについて、入学されたみなさんと視座の共有をしたく筆を執りました。

最初に教師とはどんな専門職なのかということを考えてみたいと思います。専門職とは、どんな職業なのかというと、ヨーロッパでは古くから、「専門職とは本来、神の領域の仕事を神に代わって行う人」であり、その職務内容を公に向かって誓言した人のことであると考えられていました。例えば、神に代わって人を裁く裁判官、神に代わって正義を執行しようとする弁護士、神の言葉を伝える神父、神がつけられた人の命を左右する医師、自然の摂理(神の意思)を解き明かそうとする学者、そして、神に代わって人を育み活かそうとする教師です。

したがって、専門職は、自らの職務遂行をたえず見直し、公に諮っていく人であり、生涯にわたって学び続ける人でなければならないわけです。つまり、教師とは、社会に開かれた省察的实践者であるわけです。

言い換えると、教師は自らの経験から学ぶ人であらねばならないわけです。自らの経験を問い直し、その経験の意味を自身の教育観・学習観・発達観等に投げかけて、専門職としてのアイデンティティの捉え直しを絶え間なく行う人であるわけです。

一方、「自らの経験から学ぶ」という言説には、反論もありましょう。自らの経験だけでは、独りよがり

になるのではないかと。狭い一人だけの経験世界から抜けだせないのではないかとという意見です。

だからこそ、教師は他の実践者との語りと傾聴による対話が必須となります。教師は、他者と対話するとき、他者の実践をカウンセラーのように聴くことはまずありません。教師は他者の実践を聴くと、同時に、たえず自己の過去の実践との照らし合わせを行っているものです。教師は実践を語り直ししながら、自らの実践の再構成を行っているのです。

私は、以前附属病院の小児科で、週に1日、カウンセリングをしていました。拒食症や不登校などで悩む子どもさんや、障害を持つ子どもさん、それに、そのご両親の相談を受けていました。そのなかで印象に残るお母さんがおられました。そのお母さんの相談というのは、自分の子どもがかわいくない。どうしたらいいのかという内容で、あまりない相談内容だったので印象に残っています。

### 内容

巻頭言	(1)
スタッフ紹介	(4)
院生自己紹介	(12)
令和6年度開講式	(32)
令和5年度長期実践研究報告作成一覧	(33)
公開研究会 等	(36)

そのお母さんに対し、月に1回、7か月程度のカウンセリングを行いました。毎回、お母さんの話を聞くのですが、その話のほとんどは、子どもさんの話ではなく、お母さんご自身の過去の話でした。お母さんの話の内容は、ご自身が母親から虐待を受けていたという内容でした。妹の誕生日にはプレゼントをあげたのに、私の誕生日には、生活が苦しいので我慢してねと言われたとか。お母さんは、妹の宿題は見えてあげたのに、私の宿題には、忙しいから自分でするように言われたとか。また、あるときには、妹のお弁当にはウインナーが入っていたのに、私のお弁当には入っていなかったとか。そういう内容を、毎回話されて帰っていかれました。

私の仕事は、その話について順を追って、何うことでした。ときには、お母さんのお母さんについて、気づいたことを、そのお母さんにお返しすることもありました。例えば、お弁当の話のときには、こんな感想を返しました。お母さんのお母さんは、離婚され、女の手1つで二人の姉妹を育てられた。そんな忙しい中で、高校の3年間、毎日、お2人にお弁当をつくられてから仕事に行かれたんだ。大変だったろうに、すごいねといった具合です。すると、そのお母さんは、必ず否定しました。でも、やっぱり参観日には、妹の教室には長くいて授業を見たのに、私の教室には顔を出しただけだったというような話を付け加えました。

そのお母さんが、7か月後にこんなことを話されました。「先生、私、本当は、子どもがかわいくないのじゃないです。どうかかわったらよいか分からないのです。私の母も、そうだったのではないかと思います。母は私を愛してくれていたのだと思います。でも、へたくそで、私は、悲しかった。母も辛かったのではないかと思います。先生！私頑張って子育てしてみます。母のような悲しい思いは、したくありません。ありがとうございました」そう話されて、カウンセリングを終了いたしました。

人の過去の事実は変わりません。しかし、人はその過去の事実をつなげて自分の物語をつくって、生きているのです。そして、その物語によって現在の事実

の意味が変わり、将来に向けての方向性も異なってきます。ところが、省察や対話を通して振り返ると、自分の物語が変わってきます。人は、その過去の事実を選びなおすことで、今までとは違った物語を生きていくことができるのです。あるいは、同じ過去の事実でも、異なった事実のつなぎ方ができるようになると、自分を支える過去の物語を変えることができます。過去の物語が変わると未来の物語が変わります。

人は物語りながら自分を創る生き物なのです。人は、はじめと終わりのある時間軸の中で生きる生き物です。ですから、時間の系列化によって生じる因果的なロゴスから離れて生きることができません。しかし、対話によって、沢山の過去の事実が浮かび上がってきます。対話をすることで、過去や未来が今の中に溶け込んでいくのです。この時間軸から一時の解放を得て、人は自己の全ての経験が、縁起によって繋がっていることを味わうことができるのです。そして、浮かび上がった事実を繋ぎ合わせてみると、新しい因縁を見つけ出すことができます。そうやって、ロゴスとレンマをつなぎ、人は、新しい自分をつくることのできるのです。

教師とは、自らの過去の実践の意味を捉え直し、**過去を新しくしていく人のこと**です。仮に、自分にとってうまくいかなかった実践であっても、他者の実践の語りを聴き、自らの実践の意味づけや足りないものを補って再構成してみると、失敗に思えた実践例が、これからの自分の実践に向けた**仮定系(教育的価値観)**となることができます。**教師は範例科学の徒**なのです。したがって、事例を積み重ねて、それを意味づけし直すこと以外に、優れた教師になる手立てはありません。教えられた知識は、外付けされた外部記憶装置のようなものです。自らの全ての経験の元にあるCPUの改変なくしては、利用されることはないのです。そして、CPUの改変は自身の経験の捉え直しによって実現するのです。

特に専門職は、過去の実践を語りながら再構成し、明日に向けて実践を範例に鍛えあげる人のことを指します。また、それが**熟練化**するということでもあります。ですから、教師は一人で育つことはありません。

教師が育つためには、**学び合うコミュニティ**が必要になるのです。言うまでもなく、子どものことで語り合う文化のない学校では、教師は育つことはありません。

さらに、教師が省察的实践者であるために、もう1つ必要なことがあります。それは**実践の記録**です。教師は、実践を書くことで、振り返ることができます。そして、書いた記録を介して、他の実践者と対話することで、省察の深みを大きく増すことができます。実践の記録を取ることは、大変なことですが、日々記録を残すことに心がけていただきたいと思います。さらに言うならば、教師には実践記録をまとめて振り返ることが必要となります。1回1回の実践記録を箇条書きに残すことは、根気さえあれば、誰にもできます。ところが、例えば、1年間の実践をまとめようとすると、箇条書きでは済まされません。これを繋げて筋立てなければならぬからです。筋立てるといふこと、つまり、物語るといふことを通して、自らの持つ仮定系(教育観や発達観など)と向き合うことが必要なのです。言い換えると、**長期の実践記録**をまとめなければ、自分と向き合うことができないのです。自分と対峙することなしに教育観を見直すことはありえません。

教師が対話によって省察を深めるにあたって、もう一つ重要なことがあります。それは、対話の中に**異質者がいることの肝要性**です。身近なもの同士での対話は、子どもたちの状況も共有できているので、気楽に話すことができ、必要な時にすぐに話せて、明日の実践に役立てることができる良さがあります。一方、対話に異質者(他学年や他校の教員、大学教員、指導主事、さらには他の専門職等)が混じると、そうはいきません。それまで、無前提に話げできたことができなくなってしまいます。

そんな中で、異質者に語りの内容を伝えようと思えば、相手と自分の共有できる深さまで掘り下げて、話の内容を組み立てなければならなくなります。否が応でも、自らの教育観・学習観・発達観等に近いところまで掘り下げて、共有する点を見つけ出し、そこから今の実践を語らなければならなくなるわけです。

その分、実践の振り返りが、自らの教育観・学習観・発達観等の捉え直しに近づくことができるわけです。

今、教師に求められていることは「学習者主体の教育」への学習観の転換です。そうであればなおさらのこと、異質者を交えた対話が重要味を帯びてきます。ただし、常に異質者がいればいいということでもありません。異質者はうるさいものです。異質者がいると、疲れてなかなか前に進みません。研修会の要のところで、異質者に加わってもらうようなコミュニティの作り方が必要だということでもあります。

このことは、裏返して言うと、自分のコミュニティに異質者が入るといふことだけでなく、自分が他のコミュニティに参画するといふことでもいいわけです。つまり、自分がいくつかの**分散型コミュニティ**に参画するといふことで、異質者の役割を果たすこととなります。それぞれのコミュニティには、それぞれのコミュニティの役割があります。そして、自分の経験から学んだことを、その役割の視点で再構成してみることが、さらに一層、自らの教育観を問い直すことになるからです。コミュニティが活性化するためには、このような多層で、多彩な役割を持つ**コミュニティが分散しながら集約する(つながり合う)エコシステム**であることが重要となるのです。

みなさんは、今回、教職大学院というコミュニティに所属することになりました。このコミュニティも、みなさんが参画する沢山のコミュニティの1つです。学級集団、学校の教員集団、どれも教職大学院の集団と**相即相入**の関係にあるコミュニティです。この異なる機能を持つコミュニティ間に繋がりを見つけ出すことができると、学びの視野が一挙に拡大することができるように思います。

本学の連合教職大学院は、以上述べてきたような視座のもとにカリキュラムが構成されています。カリキュラムは、陰に隠れた存在であり、たえず修正されていますので、気づきにくいものです。それでいいように思います。まずは、**自分の経験との対話が、他者との対話の中で実現できるのか**、味わっていただければ幸いです。味わってみて、面白そうだったら、影の部分にも目を伸ばしてみてください。



## スタッフ紹介

### 福井大学連合教職大学院 教授 鮫島 京一 (さめしま きょういち)



「はじめまして」と言うには気恥ずかしいです。2012年に福井大学の教職大学院と出会い、世界が広がりました。幸せになりました。アラブの詩人は「幸せは目指す場所ではなく、帰る場所だ」と語っています。連合教職大学院で仕事をすることができる私の喜びを表現するに、なんとびつたりの言葉なのでしょう。30歳のときに教師の仕事につきました。奈良女子大学附属中等教育学校（附属中等）に拾ってもらいました。社会科の公民科の教師となりました。2000年4月のことです。今年の3月に副校長を退職するまで附属中等で仕事をしてきました。オールドルーキーでした。いまだにそうです。ずっとかけだしです。

はじめは、勉強してきた社会学の知識を活かしながら社会科の授業をしていました。人文・社会科学の言葉を生徒につかませることをだいにしました。しかし、言葉をわがものにするということは、世界の広がりを実感しながら、自分をつくることにつながるはずです。そこに学ぶ楽しさがあります。だとすれば、もっとだいなことは、学ぶ楽しさをわがものにするように支え促すことにあるのではないか。この問いが、総合的な学習の時間（こんにちでいう総合的な探究の時間）の授業研究へとつながっていきました。しかし、しばらくすると実践の持つ意味をどうとらえればよいのか、という問いが出てきました。

実証主義に基づく評価方法では、一人ひとりの学習者が「数」として処理されてしまいます。ところ

が学ぶ楽しさをつかむ過程には艱難辛苦があります。そこにおける情動や感情を切らずにとらえる方法はないのか。私が向かったのは、「子どもの声を聴く」を土台に据えた臨床教育学でした。生徒の語りのなかに自らが働きかけたことの痕跡を探そうとしていきました。臨床教育学の手法を援用した実践研究です。しかし、すぐに新しい問いが生まれました。

生徒の語りにはじつに多くの登場人物が登場します。私が出した「パス」が通ったのは、そのための条件を誰かがつくってくれていたことがわかってきます。そうであるならば、言葉をつかむことを支える組織文化について考えなければならない。個人の成長が集団の成長につながり、集団の成長が個人の成長につながるような組織文化をどのようにつくればよいのか。一知半解が続いていますが、この問いに挑むなかで出会ったのが、福井大学のラウンドテーブルでした。2012年のことです。

あれから12年、いろんなことがありました。福井はもとより全国に多くの仲間たちをみつけ、奈良を拠点とする実践コミュニティをつくり、自分自身をつくってきました。この5年は連合教職大学院の奈良女子大学の准教授を兼担してきました。

残念ながら、中核教員としても、管理職としても、附属中等の組織文化を刷新・再創造するには至りませんでした。加えて、今年の3月で奈良女子大学は連合教職大学院から離脱しました。

しかし、奈良女子大学の附属学校園（附属幼稚園、小学校、中等）は拠点校のままです。とくに附属幼稚園は、3名の教師が連合教職大学院に修学しました。福井と奈良の実践コミュニティにおける学修を通じて、附属幼稚園は組織文化を再創造し、自律的な組織となり、幼児教育に関心をもつ人の実践コミ

コミュニティなることを目指しています。さらに、奈良を拠点とする実践コミュニティは質量ともに練り上がってきています。福井から奈良へ、そして奈良から札幌へ、静岡へと自律分散型の実践コミュニティへと展開しています。いずれも連合教職大学院の成功例です。

奈良女子大学で仕事をするなかで、学びとったことが二つあります。一つは、自律性を維持したり、発揮することがむずかしい状況が広がるなかで、それでも自律性を磨き上げていくためには何が必要なのかを学びました。もう一つは、連合教職大学院の教師教育の中にある「正しさ」です。その特徴は、これまで蓄積されてきた教育・実践研究の成果と、いま、ここで展開されている一人ひとりの実践の語りとをさまざまなかたちでつなぐこと (articulate) により、質の高い実践の創造を支え促すところにあると考えます。なぜ、それを「正しい」と私は言うのでしょうか。

それぞれの学校には、そうとは自覚することなく身につけている組織文化があり、そのなかで教師は仕事をします。組織文化はじつに両義的です。一方で、組織文化は断片的かつ曖昧で、場当たりの性格を持ちます (だから学校改革が進まない)。しかし、他方でそれは、日々の実践という篩 (ふるい) にか

けられ、研ぎ澄まされているものでもあります (だから学校改革が進む、ないし潜在的可能性がある)。このような両義性をもつ組織文化を学校改革へとつなぐ方法は、後者を注意深く取り出し、それを核としながら、組織文化全体を自覚的に磨き上げるように支え促していくことにあると考えるからです。

じつに骨の折れる仕事です。しかし、組織文化を再創造する中で、教師一人ひとりの中に、自分たちが主人公になって学校を変えることができるのだという実感が満ちはじめたとき、学校改革の大きな原動力が生まれていく——そういう物語を語りたいたいのです。

私と同じ天草の海で育った WANIMA はこう歌っています。

広い海を今日も進む 信じた思いが旗を掲げて  
まだ知らない世界の先に  
きっと繋がる未来を描いて  
近道なんてもったいない  
これからも冒険は続くのでしょ

このような構えで、仕事をしていきたいと思えます。どうぞよろしくお願ひします。

## 福井大学連合教職大学院 准教授 小森 正勝 (こもり まさかつ)



令和6年度よりお世話になります小森です。前職の国際協力機構 JICA に 27 年間在籍 (直近は名古屋にある JICA 中部センター) し、4 月より福井大学に勤務となりました。よろしくお願ひします。

出身は東京都で、アフリカのセネガル事務所に二度赴任、エジプト事務所に一度赴任しました。私は教

育を専門としないのですが、これまで勤務した職場で蓄積してきた組織マネジメントの視点や、国際協力の現場で培った様々な知見をお伝えすることで、他とは異なる視点からの学びに貢献できればと考えています。また、私自身が授業を協働して担当する教員の皆様だけでなく院生や学生さんからも学びながら、省察をして実践に生かしていくことを繰り返したいと思ひます。

JICA という海外での活動をイメージされると思ひますが、近年、JICA は日本国内での活動を重視しています。直近で勤務した JICA 中部センターは、東海 4 県を管轄し、多くの国内向け事業を実施してい

ます。特に教育分野では、開発教育研修（現職教員の研修）、教師海外研修（海外への訪問プログラム）、開発教育ナビゲーター（現職教員と JICA 中部のコミュニティ構築）などを実施しています。加えて、各県教育委員会が実施する教師向けの研修の一コマを JICA 中部が受け持つこともあります。そして近年の傾向として、外国ルーツの生徒が増えていることを背景に、多文化共生分野の教員向けの研修も開始しました。また JICA 中部は、現職派遣制度を通じ海外協力隊として開発途上国の教育現場で活躍していただいた教員の方々と、帰国後のネットワークづくりも強化しています。

教育分野の他にも、地域の様々な団体と連携した技術研修員の受入れ、中小企業の海外展開支援、自治体・大学・NGO と連携した市民参加による技術協力、地域の国際理解促進・多文化共生社会づくりなど、「地域社会・地域経済への貢献」をテーマに多岐に渡る事業を展開しています。福井県は JICA 北陸（金沢市に事務所有り）が管轄しているので、JICA 北陸と協力しながら、JICA と福井大学・福井県の関係団体を結び付ける仕事にも取組みたいと思います。

また私は、福井大学総合教職開発本部国際教職開発部も兼任しており、福井県の経験と知見を活かした日本型学校教育の知見を世界に発信しつつ、世界中の教職関係者の協働・学び合いの推進も担当します。すでにエジプト、ヨルダン、マラウイ、パキスタン等で具体的な協力を実施中です。世界の情勢が益々厳しくなり、様々な形での分断が進行する中で、国際協力の意義はますます大きくなっており、その中でもとりわけ、教育分野の国際協力の果たす役割

がますます期待されています。私は、福井県の優れた教育・教員育成の現状と特色などを理解し、これを分かりやすく国際協力関係者そして世界に知っていただくこと等を通じ、今後の国際協力活動の推進に貢献したいと思います。

日本国内においては、今後長期間に渡って少子高齢化が進み、地方の人口減少と都市への集中が益々進むことが予想されています。今後の大きな社会変化のうねりを乗り越えるには、世界と日本の潮流を捉えつつ、変化を恐れずに挑戦し、長期の視点を持って将来の地域社会を形づくる人材が必要です。JICA はこの領域で貢献する方策を模索し、地方自治体や大学などとの連携強化に努めています。具体的には、地方自治体や大学への出向者の派遣、海外協力隊員の帰国後の地域での社会活動の支援などです。福井県は学力レベル、三世帯世帯割合、共働き世帯割合、合計特殊出生率、有効求人倍率など全国トップレベルであり、魅力ある地域社会づくりの一つのモデルとして、その歴史や要因、教育の果たした役割等を私自身が理解し、今後の JICA の活動に繋げられればと思います。また、これらのことを通じ私自身も日本の地方創生・地域活性化に貢献できればと考えています。

趣味は、観光地、史跡巡り。神社、寺院、博物館などを巡り、その歴史や文化、伝統を知ること。それと海外旅行です。昨年は妻と 25 年ぶりにタイを旅行し、その発展ぶりや活力と、貧富の格差に驚きました。映画も好きで、最近観たのはデューン 2、ラストエンペラーデジタルリマスター版、マダムウェブです。

## 福井大学連合教職大学院 特命准教授 松村 浩成 (まつむら ひろなり)



この4月から教職大学院のスタッフの仲間入りをさせていただいた松村と申します。教職大学院の業務の他、附属学校園の教育相談等も担当

します。学部で教員としての基礎を学び、内地留学した大学院でも学び直しをさせていただいた母校での勤務ということで、職責の重みを感じながらも、これから始まる新しい出会いや取組への期待感も高まっています。どうぞよろしくお願いいたします。

私は、新採用以来40年間、いくつかの特別支援学校(養護学校)や特別支援教育(特殊教育)センターで勤務してきました。五十歳台に入ってから教頭や校長も務め、定年退職後も数年間は再任教員として勤務しました。振り返ると、その時々で貴重な学びや経験をさせていただきました。その一部をお話することで、私の自己紹介に代えたいと思います。

新採用当時は、特別支援学校に特別支援教育を専門とする教員はまだ少なく、大学で専門的に学んだとの自負があった私には、学校の中心となって頑張らなくてはという思いが強くなりました。しかし、重度の知的障がいのある子や、知覚過敏で活動への見通しが持てずにパニックを起こす子たちを目の前に「どう関わっていけばよいか?」「どう指導したらよいか?」と、正直、思い悩むことはしばしばで、私の自負は見事に打ち砕かれました。そんな頃、放課後になると、同じ学部所属する同僚の先生方と(時々コーヒー等を飲みながら)子どもたちのことや指導のこと、保護者対応のことなどについて話をしました。会議形式にとらわれることなく、同僚に気軽に相談したり、意見をもらったりすることで、自分とは異なる見方や考え方に気づくことが多くありました。また、複数の教員が協力して活動を展開するという特

別支援学校ならではの指導方法にも随分助けられました。少しずつですが、私の指導上の悩みは解決していきました。この頃は「協働」という言葉を耳にすることはまだなかったように記憶していますが、教師の協働性や現在の教職大学院が取り組んでいるカンファレンスにも通じることを、当時から経験していたのだと思います。

続いては、四十歳前後の頃に特別支援教育センターで取り組んだことです。センター業務の一つに、小中学校の通常学級に在籍する気がかりな子どもたちを対象に、学校を訪問して個別指導をしたり、担任や保護者との教育相談に応じたりする巡回指導がありました。ある小学校の軽度知的障がいのある子(以下Aさん)の巡回指導を担当したときのことで、担任は、大勢いるクラスの中で、Aさんへの対応が十分でないことに悩んでいました。そこで、私が定期的に個別で係わり、Aさんに合った課題を一緒に取り組みました。ゆっくりですが学習が進み、担任や保護者とも成長の様子を共有しました。また、普段の授業場面で工夫できる対応についても相談し、担任は、そのように努めてくれました。

一方で、この小学校にはAさん以外にも支援を必要とする子どもたちが数名いました。しかし、当時は、現在に比べて特別支援学級や通級による指導のリソースが整っている学校は少なく、この小学校も同様でした。そこで、私は、Aさんの巡回指導と並行して、校内支援体制づくりについても、管理職や、その子どもたちの担任、教育相談担当の先生などにも働きかけていきました。

その結果、管理職のリーダーシップの下、翌年度からこの学校独自の支援教室が設けられ、数名の子どもたちを対象に、校内の全ての先生方が空き時間を活用して一人1時間を担当する校内支援体制ができました。学習の底上げを図るには不十分でしたが、教室を利用する子どもたちには、自分の好きなことやできることをとおしている先生と係わること

で、成就感を味わい意欲や主体性の向上も図られました。

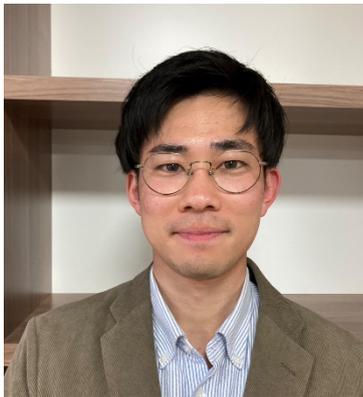
私の係わりをとおして、立場が少しずつ異なる人たちが繋がり、繋がった人たちどうしでさらに新しい価値や問題意識が共有され、より大きく支援の輪が広がる中で協働して取り組む校内支援体制が生まれました。私にとってとても大きな経験でした。

続いては、管理職の頃のことです。定年前の3年間、私は校長としてろう学校に勤務しました。ろう学校は、全国的にも都市部を除いては、1県に1～2校しか設置されておらず、本県のろう学校も県内唯一の聴覚障がいのある子どもたちを対象とする学校です。それ故に、聴覚障がいのある子どもたちを取り巻く医療・療育等の状況の変化に加え、大量退職の時代が到来することとも相まって、聴覚障がい教育の専門性の維持・向上は重要な課題となっています。そのため、本県のろう学校では、学校独自の校内研修システムを構築し、経験の異なる教員同士が学び合っていま

す。このシステムは私が赴任する前より実践されてきました。私の務めは外部講師の予算を確保したり、研修の企画・運営を行う担当の先生方を支えたりすることだけでしたが、福井県教育委員会の優秀教職員表彰(組織)を受賞するなど、全国的にも誇れるこの研修システムの一端に係われたことを嬉しく感じています。

最後に、私の好きなテレビ番組の一つにNHKのプロジェクトXがあります。この4月から18年ぶりにリニューアルして再スタートしました。ビジネスにおけるプロジェクトの本来の意味とは異なるらしく、番組に批判的な意見もあるようですが、ただ純粋に、名もない「人」の苦悩する姿とそれを乗り越える姿が感動的です。これからの私のプロジェクトXもそうありたいと願っていますし、皆さんのプロジェクトXもそうあることを期待しています。一緒に頑張っていきましょう。

## 福井大学連合教職大学院 講師 香山 太輝 (こうやま たいき)



皆様はじめまして。2024年4月1日付で福井大学の教職大学院に着任しました、香山と申します。専門は日本教育史で、特に19世紀から20世紀への

転換期に展開された大正新教育運動に着目しながら、教育的営為における教師の自己変容のプロセスや、それを支える学校経営態勢について研究しています。この度は自己紹介として、私が教育学の研究者を志すようになった契機と、教職大学院着任に際しての意気込みを綴っていただければと思います。

明確に教育を学術的に研究する必要性を自覚したのは、大学3年生の終わりのころだったと記憶しています。高校生のころから教育開発の分野で働きたい

と考えており、当時の私はカンボジアに学校の校舎を建てるボランティア活動に血道をあげていました。その時は、人々が幸福に生きるために教育は欠かせないものだというを全く疑わず、それを受ける機会に恵まれない子どもたちの力になりたいと漠然と考えていました。ですので、カンボジアに学校を建てるということも当然良いことだと信じていました。

しかし、困ったことが起きました。カンボジアで学校建設作業に取り組んでいる時のことです。壁を塗装するためのペンキの缶が固くてなかなか開けることができず、私たちボランティアの日本人大学生は途方にくれていました。その時です。現地の子どもたちがふらっとやってきて、彼らはなんと、その辺に落ちていた廃材を拾い、槌子の原理を利用してとても簡単にその缶を開けてしまったのです。日本では近年、問題解決型の学習が注目されていますが、これから教育開発の支援をしようとしている先進国の大学

生よりも、支援される側のはずのカンボジアの子どもたちのほうがうまく問題解決してみせたのでした。

この出来事に遭遇した時から、学校教育制度が整備されているからといって、良い教育を受けることができるとは限らないのではないかと考えるようになりました。では、カンボジアに学校を建てることは本当に必要なのだろうか。自分が日本で受けてきたような学校教育をカンボジアに輸出してしまうことは、かえって良い教育を受ける機会を奪うのではないか。実際に日本では学校があることによって息苦しい思いをする人がある。学校に行けないことは本当に不幸なことなのか。この経験によって私は、教育、あるいは学校というものが人々にとって本当に必要なのか、もし必要だとすれば、その必要性はどのように説明できるのだろうか、問わずにはいられなくなってしまいました。これが、教育学研究を志した一つのきっかけでした。

この問いに向き合うためには、自分が抱いている教育や学校のイメージを一度解体しなければならぬと考えました。そのための手段として、教育の歴史を研究するようになりました。人類の長い歴史の中で見ると、私たちの知っている学校教育が始まったのはごく最近のことです。現代とは異なる文化や価値観のもとでは、多様な人間形成の営みが展開されてきました。そうした新鮮な人間形成の営みと出会うことのできる教育史研究は、私にとって異文化体験でした。教育は、私たちの知っている姿とは別の姿であり得るのではないかという希望を抱くことができる体験でした。

ただし、それら歴史の中で出会う人間形成の意味やそれに関わる人々の意図を“理解する”ということはとても難しいことだと感じています。歴史研究では当然、その場にいた人に直接会って話を聞くことはできないので、断片的な史料をつなぎ合わせ、想像力をもって実践の意味や人々の意図を読み解いていくことが求められます。この想像と解釈は、多分に研究者自身の持つ価値観や思考の枠組みによる制約を受けます。既存の教育観や学校観を解体しようと試みたはずなのに、対象となる人間形成の営みの意味を自分の勝手な価値観で読み解いてしまうという危険性を教育史研究は孕んでいる。そのことに自覚的にならなければならないと自分に言い聞かせて研究してきたつもりです。

安易に他者を理解したつもりにならないように踏みとどまり、自分には思いもよらないような理屈や背景があるのではないかと想像することは、あらゆるコミュニケーションの場面で必要になるのではないかと考えています。とりわけ、自分と近い文化圏内で生活していた人と関わる時には、より一層重要になるのではないかと感じています。

教育や学校への関心を共有しながらも、多様な背景を持った方々が集まる教職大学院というコミュニティは既存の教育観や学校観を相対化していく上で大変貴重な場であると、とても楽しみにしています。共感や理解を急がず、丁寧に言葉を交わしながら、お互いの中にある微妙なズレに誠実に向き合えるようなコミュニケーションを心がけたいです。そうしたやり取りを通じて、教育という営為が持つ新しい価値を皆さんと共に発見できたら嬉しいです。

## 福井大学連合教職大学院 コーディネーターリサーチャー 川崎 正人(かわさき まさと)



私は2009年3月に、福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻スクールリーダー養成コースの第1期生として研修を終えました。その後、教育行政機関での勤務、

公立中学校での勤務を経て、今春からコーディネーターリサーチャーという立場で教職大学院での仕事に携わることになりました。よろしくお願いいたします。

当時45歳だった私が教職大学院での研修の機会を得たことは、教員人生の大きな転機になりました。

「探究」「省察」「協働」など、それまでの教員生活の中ではほとんど使うことがなかった言葉を意識するようになるとともに、教師の指導方法を観察・議論することが中心だった授業研究においては子どもの学びを見取することを心がけ、今でこそ聞きなれた「教師主導の授業」から「子ども主体の授業」への転換に努めました。

大学院での研修を終えると、越前市教育委員会で指導主事として4年間勤務し、続けて福井県教育庁で学校教育政策課、高校教育課、義務教育課を転々として合計で7年間仕事をしました。また、中学校の校長を4年間務め、「生徒の命や体、人権を守る学校」「生徒一人一人を大切に作る学校」「生徒の夢や願いを実現する学校」「家庭・地域とともに歩む学校」をめざしてきました。

それぞれの職場において、教職大学院でお世話になった方、同期や後輩の院生とともに働くことができ、理念や考え方を共有しながら授業づくりや学校づくりに取り組むことができました。教職大学院での学びがそのベースにあり、そのとき築かれたネットワークは私の財産となっています。

さて、「茹でカエルの法則」をご存じでしょうか。カエルを熱湯の中に入れると驚いて飛び出しますが、常温の水に入れて徐々に熱すると、カエルはその温度変化に慣れていき、生命の危機と気づかないうちに茹であがってしまうという内容で、ゆっくりと進む変化に対応することの大切さを表した寓話です。

次期教育振興基本計画への対応や学校教育におけるDXの推進など、大きな変化はもちろんのこと、小さな変化やゆっくりと進む変化に対する感度を高め、適切に対策をしていくことが大切です。

学校運営について語る際、「不易流行」という言葉をよく耳にします。「不易」と「流行」を分けて語られることもありますが、もともとは松尾芭蕉が唱えた俳諧の理念で、不変の真理を知らなければ基本の確立は難しく、変化を知らなければ新たな風が起らない(進展がない)ということです。辞書を引くと「いつまでも変化しない本質的なものを忘れない中にも、新しく変化を重ねているものをも取り入れていくこと。また、新味を求めて変化を重ねていく流行性こそが不易の本質であること。」と書かれています。

丸美屋食品工業の「のりたま」は、1960年の発売以来、ふりかけ市場ではさまざまな調査データで長年にわたりナンバーワンの座を譲らない、いわば絶対王者といえる存在です。味の改定を繰り返し、現在販売されているのは9代目だそうです。社会の変化や消費者の味覚の変化にあわせて、味の改定を続けているのです。絶大な人気を維持するために必要なもの、それが変化なのです。

ダーウィンの「進化論」で言えば、生き残ったのは、強い種でも優秀な種でもなく、変化した種だけということでしょう。教育の世界においても、本質を見極めながら、常にアップデートに努めていきたいと思えます。

「今日の一針 明日の十針」これは、私が教師になって3年目に出合った言葉です。今日ならば一針縫うだけで繕えるほころびをそのままにしておけば、

明日は十針も縫わなければならなくなるという意味で、今しないので後回しにすることを戒めています。学習指導においても生徒指導においても、そして、校長になってからも、判断に迷ったときや悩んだときはこの言葉が背中を押してくれました。これからもこの言葉を意識して行動したいと考えています。

教職大学院で仕事ができることに感謝しながら、たくさんの人と一緒に学んでいきたいと思えます。カンファレンス等でお会いできることを楽しみにしています。

## 福井大学連合教職大学院 非常勤講師 西尾 幸代 (にしお さちよ)



この3月に特別支援学校の校長職を退職し、4月から本学連合教職大学院の非常勤講師として勤務させていただくことになりました。

私自身、福井県特別支援教育センター（教育機

関）で勤務していた2010年に本学大学院のスクールリーダー養成コースに入学しました。当時、カンファレンスでお世話になった先生方と再びご一緒できまことが嬉しく、私自身の学びを支えていただいたことを微力ではありますが恩返しできればという気持ちと、かなり進化されている連合教職大学院の今の姿から学びを得ることを楽しみにしております。

初任校では福井東養護学校の「重複障がい部」に所属し、音声言語によるコミュニケーションが難しい、日常生活のほとんどに介助が必要な子どもたちの実践に長らくかかわりました。実践研究のテーマは「コミュニケーション行動の形成」「課題探究型の学習支援」「地域社会の活動拠点に関すること」等です。子どもの主体的な動きや認知活動は人や物のかかわりを通して発達していき、人との能動的なやりとりのなかで育まれることから、そのかかわりを省察する研究に取り組んできました。その実践を支えてきたのが月2～3回、自身の実践をまとめたレポートやVTRを活用しながら実践を語り、外部講師も招いて行われた学習会（事例検討会）でした。まさしくそこには、実践－省察－再構成の学習サイクルがありま

した。それらを通して、「子どもの起こす行動には意味がある」「子どもの行動を肯定的に捉える」「子どもの動きを待つ」など、子どもへの理解を深めてきました。さらに、地域に出て活動することが多くなったことで、地域の方々も直接子どもたちに語りかける、子どもの表情や動きから気持ちを察して対応くださることが増えてきました。「地域で遊ぶ」「地域で学ぶ」「地域で働く」という夢を描いた時期でもあり、今から思えば、地域社会で生きる、共生社会の実現に向けた活動を先駆けて行っていたのではないかと思います。

その後、時代も特殊教育から特別支援教育へと転換する頃、私は福井県特別支援教育センター（教育機関）に指導主事として勤務することになりました。総括主任・所長時代を含めると通算11年間勤務し、主に就学相談と園や小・中学校、高等学校に出向いての配慮が必要な児童生徒がいる通常学級の授業参観や教育相談、訪問研修、特別支援教育やインクルーシブ教育の体制づくりの業務に携わりました。最初の5年間はどちらかというと助言者としての立ち位置で無我夢中で取り組んでいました。学校からは具体的な支援方法を求められましたが、子どもや先生方の行動変容につなげていくことの難しさを痛感するようになりました。ちょうどその頃、本学教職院大学のスクールリーダーコースで学ぶ機会を得て、組織支援、学習する組織という考え方に出会い、日々、子どもに向き合っている主体は担任や学校であり、「一緒に考えていく」というスタンスが必要ではないかと考えるようになりました。助言者ではなく、まずは理解者

になること、「傾聴」によって、相手の方自身の気づきと学びを肯定的に理解し、意味づけていくことで自己解決力が高まっていくことを実感するようになりました。この「傾聴」や「バックアップ」の視点は、職場の対人援助力を高め合い、同僚を支え合うことにつながるのではないかと考えるようになりました。

50代になり、管理職になってからようやく、人の助けになる聴き方について本格的に学ぶようになりました。今でもついつい自分軸で聴く、つまり、自分の価値観や常識で判断しようとする、世間体にとらわれる態度が出てきてしまいます。相手に軸を置くためにはとことん、相手になってみて、話の情景を思い浮かべること、そして、良い聴き手であるためには、話の方向性や結論（着地点）をこちらが一方的に決めたり、とらわれてしまったりせずに「問い」と「確認」を繰り返しながら、語り手が自ら考え、答えを導きだせる力があることを信頼して待つことです。

それを体得するためにはかなりの練習量が必要です。それでも管理職として、自分のアドバイス志向や着地点のことばかりを考えて聴いていた癖を諫め、まずは、しっかりと子どもたちや保護者の方、先生方の話をしっかり聴こうと心がけてきました。そうすることで、私自身も考えのズレに早く気づけるようになり、多様な意見にも耳を傾けられるようになって、少しずつ学校経営に活かすことができるようになりました。また、人の助けとなる聴き方ができるようになると、自分自身の心の声にも丁寧に耳を傾けることができるようになり、「省察」の質が変容していくことを実感しています。

これから出会う院生の皆様とやわらかな場をつくっていきながら、ご自身の声にもしっかりと耳を傾けていただけるようなアシストができたと思いますし、ご一緒に学び合う貴重な時間を共に深く味わえることを願っています。



## 院生自己紹介

### 学校教育目標達成に向けたマネジメント

授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

青山 莉子 (あおやま りこ)

はじめまして。今年度から連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました青山莉子と申します。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ（4系）になります。昨年度3月までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（理科）、高等学校一種（理科）です。

大学時代には、高校時に地学を勉強することができなかつたため、地学に触れてみたいと考え、理科の中でも地学を専攻していました。地学の授業には、巡

検という野外にて地層や化石を観察・調査したり、岩石などの試料を採集したりする授業があります。はじめ巡検に行った際には、先輩方が一生懸命になって石や化石を採集し持ち帰っている姿に驚きました。どうしてもどこにでもあるような石を一生懸命になって探しているのだろうと感じていました。しかし地学について学び、野外に行く機会が増えると、いつの間にか私も一生懸命に石を集めコレクションするようになっていました。今までは気にも留めなかつた石ですが、安山岩、花崗岩などを見分けることができたり、同じ安山岩でも斑晶の大きいものや小さいも

の、泥岩と見分けがつかないような真っ黒のものまであったりと、一言では語り切れないような面白さがつまっていることに気付きました。ぜひ子どもたちにも授業を通して、何気なく見ていたものや使っていたものに興味を持ち、新たな視点を獲得させられるような授業を行っていきたくと考えています。

私は子どもたちの前に立って授業を行うことに大きな不安を抱えています。「もし他の先生が授業をしていれば目の前の子どもたちの将来が変わるかもしれない。」「子どもたちの興味を引き付けられなかったらどうしよう。」と不安しかありません。そんな時、大学院の方とお話する機会があり、「不安や悩みがあることは大事なことです。逆にない方が心配した方がいい。そして悩みに対する解決策をすぐに求めず人と語り合うこと大事だよ。」と言われました。このお話を聞いて少し不安が軽くなった気がしましたが、同時に私はすぐに他人に答えを求めてしまう癖があることに気付きました。今までの生活を振り返っても何か疑問ができた際は自分で考えることよりもすぐに他人に相談したり、聞いたりしていました。そのため最近、私が何か質問した際に「うん。青山さんはどう思うの?」と返された時は、戸惑い答えに詰まっ

てしまいました。この時、気軽になんでも人に答えを求めめるのではなく、自分でも深く考え、その上で人と対話することが大事なのだと感じました。

福井大学の連合教職大学院では、「語る」ことを大切にしています。多くの人とじっくりと語ることで、自分の悩みや疑問のヒントが得られ、またそこからあらたな疑問が生まれるということを繰り返して、学びを深めているのかなと現在は思っています。最近2度もこんな言葉を聞きました。「教えることは聞くこと 学ぶことは語ること」。現在はこの言葉の意味はあまりわかりませんが、大学院で多くの人と語り合うことで、この言葉の意味を本当に理解できるようになりたいと思っています。また大学院では、長期インターンシップに加えて非常勤講師として週7コマの授業をさせていただくことになったので、インターンシップで他の先生方の授業から学び、授業で実践を行い、語ることでヒントを得て、また実践を行うということを繰り返し、常に悩みながら、学びを深めていきたいと考えています。

最後になりますが、これからお世話になります先生方、先輩方、同期のみなさん、どうぞよろしく願っています。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立武生高等学校

### 岩佐 帆花 (いわさ ほのか)

初めまして。今年度より、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、岩佐帆花と申します。昨年度までは、金沢大学人間社会学域人文学類歴史学プログラムに所属し、主に日本史を学んできました。取得免許は、中学校一種(社会)、高等学校一種(地歴・公民)です。

教師という職業は、母親や親戚が教員であることから、私にとって身近な職業でした。しかし尊敬する母と自分の違いや仕事の多忙さを感じていたことから、教師にならないと考えていたときもありました。教員免許も、一応持っておこうという気持ちで取得

を目指し、大学でも教育学ではなく歴史学を専攻しました。そんななかで、教師を志望するようになったきっかけは3つあります。

まず1つ目は、問いを立て主体的に取り組む大学での学びが非常に面白く、そのようなものの見方や考え方で生徒たちが学ぶことを楽しいと思える場を作り、歴史、特に日本史の面白さを伝えていきたいと思ったからです。歴史のなかでも日本史に興味を持ったのは、現在に続く様々な問題や曾祖母から伝え聞いた戦争の話等から、自分が生きる現在の社会や地域の過去について知りたいと思ったことがきっかけ

けです。そのため大学では、プログラム制という様々な分野の授業を幅広く受けられる制度のもと、日本史に拠点を置いて学ぶことを選びました。大学では、史料を批判的に読み、文献史料にもとづいて考察、議論し歴史を再構築していくという方法を学んできました。それまでの暗記する歴史ではなく、疑問を持ち、史料にもとづいて他の人と議論し様々な視点から捉え直す歴史は本当に興味深く、新たな気付きや発見ばかりであり、歴史に学ぶことの意義や面白さを実感しました。また、他分野で学んだことが背景理解につながることもあり、つながっていく学びの面白さにも気付くことができました。どうしても覚えることが多くなってしまう科目ですが、生徒が受け身で、暗記科目だと捉えてしまうような授業ではなく、生徒自身が面白さを実感し、主体的に取り組んでいくような授業を作りたいと思いました。また、ゼミの取り組みでは戦争体験の聞き取りも行い、生の声を記録する活動を行ってきました。歴史教育の重要性や主権者教育にも関心を持つようになり、それらの実践にも取り組みたいと思うようになりました。

2つ目は、教員だけでなく様々な職業をみてみたいという理由から、インターンやアルバイトで様々な職種や働き方を体験したなかで、私は利益を追い求めるよりも人が学問に向き合い、また、人と関わるなかで学び成長する様子やそれを支えること、そしてともに学んでいくことに魅力ややりがいを感じると気付いたからです。そして、教育現場では生徒だけでなく教員の方々とも関わるなかで、新たな価値観に出会うことができ、自分自身にとっても学びが深まり、成長できる場であると感じました。

3つ目は、個別指導塾の講師をしていた際に、生徒がだんだん心を開いてくれたことに嬉しさを感じ、さらに、どうしたら学ぶことが楽しくなるだろうか、

どうしたら生徒自ら疑問や関心を抱き納得するような流れにできるだろうかと考え工夫しながら、試行錯誤することに楽しさを覚えたからです。これらのことから、学ぶ面白さを伝え、さらに自分自身が学び続けられる教員になりたいと思いました。

教育実習では、実際に生徒から反応が返ってくることの嬉しさを経験した一方、教えるべきことをこぼさずに授業を行うことに精一杯で、生徒の反応を授業に活かしたり、主体的な学びを促すような働きかけや疑問を抱かせるような問いかけをしたりすることができず、自分自身の力不足を痛感しました。また、生徒にとって面白い授業とはなにか、探究的な授業とはどのようなものか、受験のための学習とどう組み合わせるのかなども課題として感じられました。これらに向き合う時間と学びの場が私には必要であると感じ、教育現場で直接仕事を学び実践力を高めながら、授業研究や実践の振り返りなどを通して課題に向き合い、学びを深めていくことができる教職大学院への進学を希望するようになりました。

大学院では、様々な方々と関わり教育に重点を置いて学んでいけることにわくわくしています。このような貴重な機会を有意義に過ごせるよう、インターンシップでの実践や課題に対し丁寧に振り返り、さらなる学びや実践につなげる努力やカンファレンスなどでは自分の経験や実践、そこから考えたことなどを整理しまとめて人に伝わるように話すことなどを意識し、一つ一つの学びを大切に取り組んでいきたいと思っています。わからないことも多々ありますが、大学院の先生方や院生のみなさん、そして配属校の先生方、生徒のみなさんと交流を深め、学びを得て、何事も力にしていきたいと思っています。2年間よろしくお願いたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

## 梅田 菜々穂 (うめだ ななほ)

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院に入学しました梅田菜々穂です。所属は、授業研究・教職専門性開発コース4系です。出身は福井県で、昨年度までは静岡大学教育学部・学校教員養成課程・教科教育学専攻・家庭科教育専修に所属し、食物学、特に和菓子の分野を専門に学んできました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(家庭)、高等学校一種(家庭)です。フルートを演奏することが好きで、中学校1年生から始めて11年目になります。幼いころから多くの習い事をさせてもらい、その多くを10年ほど続けました。多忙な日々を過ごす中で、自分を見失ってしまうこともありましたが、空手や書道で段位を取得したこと、ソロの音楽コンクールで受賞したこと、華道の作品を出展させていただけたこと、そしてなにより、大好きなフルートに出会えたこと、そのすべてが、今の私を支えてくれていると感じています。私に期待を寄せ、鼓舞し続けてくれた両親には、感謝してもしきれません。

私が大学院へ進学した理由は、特別支援教育に興味があるからです。特に、インクルーシブ教育に関心があり、大学院ではその分野を中心に見識を深めたいと考えています。

日本は、他国に比べてインクルーシブ教育が遅れています。今の日本の教育では、障害を持った子どもたちやその保護者が、通常学級で障害のない子どもたちと一緒に学びたい、学ばせたいと思っても、その願いが叶わないことがしばしばあります。たとえ、通常の学校が「障害がある子を受け入れたい」と思っているとしても、学校側に余裕が無い、教員の数が足りない、障害に合わせて支援できる教員がいない、学校看護師の設置が難しい、等の理由から、受け入れられないこともあります。私は、そこに懸念を抱いています。

「学びたい人が、学びたい場所で、学ぶことが出来る環境がある」ということ、それが子どもたちの意欲関心、個性を伸ばすと思うのです。子どもたちの「学びたい」という気持ちを、制度が阻止する事は望ましく

ないと感じています。特別支援学校だからできること、通常学校で過ごすからできることを比較したうえで、障害を持った子どもたちとその保護者が、自らの進む道を、自らの意思で決定できる未来があたりまえになることを願っています。

また、私は、障害を持つ人と持たない人との関係性にも疑問を抱いています。障害を持たない人が、障害を持つ人を助けて「あげる」という風潮、意識、障害を持つ人と障害を持たない人の間でどこか線引きをしている雰囲気には私は居心地の悪さを感じています。困っている人がいたら助け合うことは普通のことで、そこに障害の有無は関係ありません。助け合い、共に生きていくことに理由はいらないし、助けてもらう事への申し訳なさを感じる必要はないと思うのです。ただ、お互いに感謝の気持ちを忘れず、尊敬の気持ちを持つことが大切なのではないかと思います。障害のある人とない人での線引きに居心地の悪さを感じながらも、私自身も無意識的に一線を引いてしまっているのではないかと考えます。それが、他人と自分の境界線なのか、障害がある人との間の境界線なのかが分からなくなることも少なくありません。無意識で線引きをしてしまうし、自分の価値観に染まった色眼鏡で見てしまうけれども、その線や眼鏡をなくすことは、ほぼ不可能だと思います。大切なのは、自分が引いている線や眼鏡を見つめ直し、向き合う事だと考えています。私にとって、障害を持つ人がみている景色は未知で、勝手にラベリングをしてしまい、反省することもあります。それはきっと、私だけではなくて、障害のある人もない人も、お互いを知らないがゆえに敬遠し合ってしまうことがあるのではないかと思うのです。インクルーシブ教育の推進は、障害がある人と障害がない人を結ぶ最初の架け橋になるし、教育課程を終えた後も、一緒に生活をした仲間として互いを知っているということが、差別のない社会を築くうえで重要なピースになると感じています。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

### 小室 祐斗 (おもろ ゆうと)

はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、小室祐斗と申します。昨年度までは、福井工業大学スポーツ健康科学科に所属していました。現在、中学校一種（保健体育）、高等学校一種（保健体育）を取得しています。今年度から、免許取得プログラムで特別支援学校一種を取得予定です。

私は小学校時代に2度の転校経験があります。転校によって新しい環境に適応することは容易ではありませんでしたが、それぞれの経験から多くを学びました。一人で苦しんだ経験や、当時の学校での人間関係は厳しいものでした。先生も含めて、生徒同士の関係は緊張感があり、居づらい状況でした。その中で、唯一、生徒一人一人に平等に接し、気にかけてくれた先生がいました。その先生のおかげで、学校での居場所を見つけることができました。中学校に進学しても、人間関係の悩みや学校生活での苦労は続きました。良い教師と悪い教師の両方を知ることができ、教師の存在の大切さや、生徒との信頼関係の重要性を痛感しました。その中で、嫌な経験を二度としたくないという思いが強くなりました。また、これからの生徒たちにも同じような経験をさせたくないと思うようになりました。

私の趣味は野球で小学3年生から大学3年生の13年間続けてきました。中学から高校、高校から大学への進学はスポーツ推薦で行い、高校では岐阜県の中京高校に通い、寮生活を送りました。この期間には、技術の向上だけでなく、人間関係や家族のありがたさ、自立することの大切さを学びました。特に寮生活では、日々の生活やチーム活動を通じて、人間関係や家族との絆の大切さを身をもって体験しました。また、自ら考え行動することの大事さも学びました。

大学では、教授と話し合い卒業研究でソフトボールの初心者指導について研究しました。研究をして

いく中で、体育の楽しさや面白さを伝えていくためにはどうすればよいか、どのような指導をすれば生徒たちが成長していくのかなどについて考えていました。また、教育実習では中学校で授業を行い、初めて生徒たちと直接関わる機会を得ました。授業方法や生徒指導についての悩みや苦労もありましたが、その中で成長することができました。特に、通常学級に特別な配慮や支援を必要とする生徒がいる場合には、どのように接して授業を進めていけばよいかについて悩み、納得のいく答えを見つけることができず、その時点でできる限りの対応をしました。

これらの経験から子どもたちの成長には、教師の存在が非常に重要だと感じています。教師が生徒たちに寄り添い、適切な指導を行うことで、彼らの可能性を引き出し、未来への道を切り拓くことができます。私自身も教師として、生徒たちが健やかに成長し、自らの夢を追い求める力を身に付けられるよう努めていきたいと思い、教職大学院に進学することを決めました。

教職大学院では、授業研究やインターンシップ、カンファレンスなど様々な活動を通して、教育に関する知識やスキルを深めていきたいです。特に、大学での経験を活かし、初心者指導について研究し、体育の楽しさや面白さを伝えるための効果的な指導方法を模索していきます。また、教育実習での経験を通じて得た知見を生かし、現場での実践力を高めていくことも重要だと考えています。

また、教職大学院での3年間を大切に、生徒たちに寄り添い、彼らの成長に貢献できるような教師になることを目指して取り組んでいきたいと思っています。また、生徒たちの可能性を引き出す方法についても継続的に考えていきたいと思っています。教職大学院の先生方、インターンシップ先の先生方、院生の皆さん、3年間よろしくお願ひします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立高志高等学校

## 勝山 紘史 (かつやま ひろし)

初めまして。この度、福井大学連合教職大学院に入學しました勝山紘史と申します。所属は、授業研究・教職専門性開発コース4系です。福井県福井市出身で、昨年度までは福井大学教育学部学校教育課程中等教育コースに所属し、専門教科として数学を学んできました。取得免許は、小学校二種、中学校一種(数学)、高等学校一種(数学)です。

音楽がとても好きで、4歳から小学校6年生までピアノを習っていました。それ以降は自由気ままに好きなようにピアノを触っており、当時流行っていたボカロ曲や有名なJPOPを耳コピーしては弾いていました。今の得意ジャンルはジャズで、即興やジャズアレンジが得意です。また高校では合唱部に所属しており、歌も大好きになりました。大学では社会人合唱団に参加したり、他合唱団のイベントにゲストとして参加したりしています。サークルはアカペラサークルと軽音サークルに所属しています。そこではそれまでに培ってきたアレンジ力や魅せる力を存分に発揮でき、とても楽しく活動しています。更に今では十分外部で披露できるような曲を作ることに至り、かれこれ50曲以上作曲しています。

私の学部生活で特に興味深く取り組めたことは学問数学であり、特に解析学を中心に学びの幅を広げていきました。卒業研究では「曲線と曲面に関する研究」を行いました。例えば曲線や曲面の曲がり具合や振じれ具合を表す式から、曲線や曲面の形の秘密を探ることなどをし、式とグラフの形の関係性を考え

ました。研究を進める中で感じたことは、新しく学習する内容で得た知識を踏まえて、気になったことや疑問に思ったことを自ら挑戦する探究心を持てる嬉しさが、数学にはあるということです。理解を進めることで疑問が生じ、解明し続ける中で新たな疑問を迎え、更に挑戦するという繰り返しが、自分にとっては非常に有意義であり悦びとなりました。教授からは、研究を捗らせる探究的な視点のヒントを多く頂き、論文作成時には理解を進めるための文章構成や論理のご指導を賜りました。そういった手厚いサポートのおかげで、自身の数学的思考力や論理力が良く身についた実感があります。

この経験は、小学校算数から高等学校数学まで幅広く通用すると考えています。「別の状況ではどのような結果になるのだろうか?」「一般化すると何か新しいことが分かるかな」などふとした意見から何かしらやってみることが自分にとって大きな発見につながるかもしれません。そういった小さな意見を拾って育ててみるのが、数学って面白い、楽しいと感じられることにつながるのだと思います。

そのように感じた私の気持ちを、インターンシップ内における授業で生徒たちに上手く届けられるように頑張ります。また、中高一部一貫であるため、数学科における系統性も理解し生徒の学びに上手くつなげられるように頑張ります。また、お世話になる先生方や他院生から多くのことを学び、充実した2年間にしていきます。どうぞよろしくお願ひします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井県立武生高等学校

### 加藤 健太郎 (かとう けんたろう)

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院授業研究教職専門性開発コースに入学しました加藤健太郎と申します。昨年度まで、奈良大学文学部史学科に所属しておりました。取得免許は中学校1種(社会)、高等学校1種(地理歴史・公民)です。大学では主に環太平洋を中心とする現代史について学びました。

私が教員を目指した理由としては2つあります、1つ目は父が教員であり日々楽しそうに仕事をするその背中を見て教員を目指しました。2つ目は社会、特に歴史が好きでこの楽しさ、面白さを子どもたちに伝えたいと考えたことです。ではなぜ教育学部に進まなかったのかと言いますと、高校時代の担任から「教育学部に行って教員を目指すのもいいけど、教育学部以外でも免許は取れるから大学では歴史を専門的に学んでみたら?加藤にはその道のほうがあっていると思う」と文学部史学科に進むことを進められたことが理由です。

史学科では、古文書や映像史料、新聞史料などの読み取りを通して、その時代の政治、文化、人々の暮らしについて学ぶことができました。例えば第二次世界大戦中～冷戦期のアメリカでは核攻撃を受けた際の対処法として“duck and cover”という標語が用いられていたことや、第二次大戦中のインドネシアなどの占領地域での日本軍政、古代イスラーム圏での政治などについて触れることができ、自分の知らないことを知れるということを体感し、歴史の面白さを再確認しました。また、奈良という立地を生かし、関西圏の様々な遺跡や博物館に足を運んだり、歴史系のイベントに参加したりし、自分の目で見る、触れる、追体験するというのもしました。この経験を通して私は実際に体験することの大切さや本物に触れることの大切さというものも実感しました。

さらに、奈良大学教職学習会に所属し、ディスカッションなどを通して教育に対する知見を広めるとともに模擬授業を行い、同期やOB・OG達と検討を行い、生徒が楽しいと思える授業づくりや生徒が進んで学ぶ授業づくりの難しさなどを実感しました。

「歴史の楽しさを伝えるためにはどのような授業づくりが必要なのだろうか」、「考える社会科の授業とはどのような授業なのだろうか」という2つについて深く考えるようになり、大学で経験した学びに本物や実物に触れた経験が生きてくると気付きました。実際、教育実習に行った際に実物資料を用いた授業を行いました。その授業では生徒が普段以上に食いついてくれている印象を受けました。しかし、自分の実力不足のため知識を詰め込むだけの授業が多くなってしまい、生徒に考えさせることができなかつたり、生徒の興味関心を引く授業ができなかつたりと多くの反省点がありました。そのような中で大学ではあまりできなかった教育についてもっと研究したいと思い大学院に進学することを決めました。

教職大学院では、授業研究やインターンシップ、カンファレンスなどを通して、生徒自身が考える教育について学んでいきたいです。学部時代に自分が体験したことを軸にして大学院での新たな知識を身に付けながら、今までの「暗記する歴史の授業」から「考える歴史の授業」について考えていきたいです。また、大学では教科教育について主に学んだため、学級経営について詳しく学ぶ機会が少なかったと感じています。そのため、学校の先生方がどこを注視して学級経営を行っているのか、その際のポイントはどのかなについても学んでいきたいです。

2年後、胸を張って教壇に立てるように、ここでの学びを有益なものにしていきたいです。これからどうぞよろしくお祈りします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

## 島田 涼真 (しまだ りょうま)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学しました島田涼真です。取得免許は小学校一種、中学校一種(社会)、高等学校一種(地理・歴史)です。

私が教師を目指し始めたのは、自分が小学生から高校生に至るまで、自分を支えてくれたのが「教師」という存在だったからです。私が喧嘩をしたとき、私が勉学に悩むとき、私が苦悩を抱える時に、私を助けてくれたのが教師でした。ですから、高校三年生の進路を決める時に、福井県の教育ともゆかりがある田村学先生や杉田洋先生の指導を受けたいと思い、國學院大學に進学しました。

大学生活は、コロナ禍のなかで一年次にはオンラインでの授業を余儀なくされ、地元福井に戻って、福井から授業を受けていました。そのため、生徒との十分なかわりもなく、インターンシップや教育実習なども先輩方や同級生の力も借りれず、苦勞をしました。そんななか、私を励ましてくれたのは、訪問先の先生方や相談に載ってくれた福井の恩師の方々でした。

また学部では、小学校の「特別活動」や「総合的な学習の時間」を中心に学びました。特別活動では教科外活動の重要性を学び、総合的な学習の時間では目まぐるしく変化する社会に対応し、探究的な見方や考え方を養い課題を解決する「探究学習」について理解を深めました。

そして大学四年生からの卒業論文では、母校の武生高校の生徒会の生徒たちが、私の「学校生活の改革に生徒が参画することの教育的効果」というテーマの研究を助

けてくれました。資料の提供やアンケートの協力、生徒会の皆さんが行っている活動についての概要を提供してくれました。県外の大学に所属しておりましたが、福井の生徒たちとも深くかわりを持っていました。

2月福井大学で開催された実践研究福井ラウンドテーブル2024に参加し、福井大学教職大学院で学びたいと思う気持ちが強くなりました。ラウンドテーブルでは子ども主体の学びを実践するコミュニティに参加し、議論を交えました。そこで現場の先生方が熱く語る「チーム学校」としての形や、教師のみならず児童生徒の力で子どもを中心に置いたコミュニティ(学校)を作っていくことについて、私の研究にも関連していることに気づきました。そのことがきっかけで、福井に戻り大学院の進学を決意しました。

大学院では、教師と児童生徒、地域や保護者と連携して作り上げる子ども主体の学びを実践するコミュニティや地域とともにある学校について学んでいきたいと考えています。さらに人口急減や超高齢社会といった地域のみならず日本が抱えるような課題に対して、どのようにアプローチし解決していくか。また地域についてよく知り、特徴を生かしていく学びについて、自身の考えと学びを福井大学教職大学院の下で広げていきたいと考えております。

教育の分野において私はまだ多くを知りません。そのため大学院の先生方、配属先の先生方と生徒、他の院生の方々から貪欲に学び、活かしていきたいと思っております。2年間よろしくお願ひします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校前期課程

### 高木 雄也 (たかぎ ゆうや)

はじめまして。福井大学連合教職大学院に入学しました高木雄也です。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)です。出身は福井県坂井市で、昨年度までは福井大学教育学部中等教育コースに所属し、中学校一種(理科)、高等学校一種(理科)、小学校一種の3つの免許を取得しました。専攻は理科教育(化学)です。小・中学校・大学ではバスケットボール部に所属していましたが、運動は得意ではありません(笑)。

私が教師を志すようになったきっかけは、中学校の時、友達にテストの問題を教えてあげたときに、「分かりやすい。ありがとう。」と言ってもらえたことがきっかけです。教師という職業は人のため、社会の役に立つ職業であり、私は将来、受け持った子どもたちに高木先生に受け持ってもらってよかったと言ってもらえるような教師になりたいと思っています。

私が大学院に入学しようと決めたきっかけは、自分自身が受けてきた教育(板書をひたすらに写すような受動的な授業)とこれからの社会に必要な人材を育てる教育(主体的・対話的な授業)の差が大きく、探究的な授業を行っていく自信がなく、主免実習や副免実習、CST型インターンシップなどで子どもたちと関わり、授業をしていく中で自分の実力不足に気付いたからです。

主免実習では、福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程で主に中学1年生の授業を担当し、全部で7回ほど授業をしました。授業をしていく中で、私は生徒と関係性を作ることは得意で、生徒が自分の発問や声掛けに対してどのように感じたのか、考えたのかなど、生徒の様子を「見とる」という事が課題であるということに気づかされました。また、授業を行っていく中で、生徒の中に先生はあまり怒らない先生だというような慣れが生まれてしまい、なかなか自分の話を聴いてもらえなかったり、授業とは

関係ないことをしたりといった行動がちらほらと見られ、生徒を指導することや、生徒の興味や主体性を引き出すような授業作りも課題であるという事が分かりました。

副免実習では、公立の小学校で2年生を担当しました。主免実習で見てきた生徒が主体となる授業とは違い、今まで私が受けてきたような、知識を教えることを重視した授業が行われていました。授業を行ってみて、小学生(特に低学年)は話し方や資料の作り方などが中学生に授業するときとは大きく異なり、より分かりやすさを重視しなければいけないという事に気が付きました。また私の課題として、授業をしているときにクラス全体として自分が話していることがどれほど児童に伝わっているかが分かっていないという事が分かりました。

学校インターンでは、公立の中学校に半年間お世話になりました。中学3年生のクラスを中心に様々な先生の授業を見学させてもらい、改めて生徒の主体性を引き出すこと、教材にひきつけることの大切さを実感することができました。私は1度だけ授業をさせてもらいましたが、やはり、つまらなさそうにしている生徒の姿が多くみられました。また、実習とは違い1週間に1度半年間という長い期間生徒と関わることによって、生徒が成長していく姿というのを実感でき、改めて教師という職業の魅力に気づきました。

大学院では、学部時代に学んだことや、積んできた経験を基に、自分が自信をもって教壇に立って授業ができるように、理科についての専門的な講義を受けたり、カンファレンスなどで教育観や授業観を語り合ったりして授業や理科についての専門性を高めていきたいと思っています。分からないことだらけで迷惑をかけるかもしれませんが、これからどうぞよろしくお願いいたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜市立柳津小学校

### 都筑 智也 (つづき ともや)

皆さん、はじめまして。今年度より福井大学連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました都筑智也と申します。出身地は愛知県名古屋で、昨年度までは岐阜聖徳学園大学教育学部理科専修に所属していました。取得免許は、小学校教諭一種、中学校教諭一種(理科)、高等学校教諭一種(理科)です。

私は、小学校の頃から教員になるのが夢でした。その当時はなんとなく教員になりたいと思っているだけでしたが、中学校のときに会った理科の先生に強い憧れを抱き、本格的に教員を志すようになりました。大学3年生では小学校と中学校の教育実習も体験し、今では小学校の教員を目指しています。

大学4年生の卒業研究では、「生活科と理科の接続について」を研究しました。小学校の低学年ではまだ理科ではなく生活科という教科を学習します。私は、子どもたちの理科の学習能力を伸ばすためには、生活科の時点で科学的な思考力を身に付けるための準備をすることが大切だと考えています。そこで私は、子どもたちが主体的に考え、問題を見つけ、その問題を解決する力を身に付けるための授業実践を行いました。また、現職の先生方にアンケートのご協力をさせていただき、生活科の在り方や経験からの教訓など様々な意見を集めることもできました。この研究を行ったことで、教科書の内容だけではなく子どもたちにとって最適な学習内容を自分で考えて実践することの大切さを知ることができました。

教職大学院では、この卒業研究をさらに深く追求していくと同時に、学級経営や生徒指導などの知識や技能を高めていきたいと考えています。卒業研究では生活科において理科と関連のある単元に絞って研究を行いました。長期インターンシップでは、他の教科との接続についても研究していきたいと考え

ています。生活科は、社会科や総合的な学習の時間などの理科以外の教科との接続も意図された教科です。すべての教科との接続を最適に行うことができるような指導法を研究していきたいと思っています。

また、卒業研究を進める過程で、幼児期から小学校低学年への接続、低学年での学級経営や生徒指導にも強く興味を持ちました。小学校1年生の学級において、子どもたちが入学後、静かに話を聞くことができなかつたり、授業中に立ち歩いてしまったりする状態が続いてしまう「小1プロブレム」も長らく問題になっています。大学4年生の時に取り組んだ教職インターンシップでは、小学2年生の段階でもそのような状態が続いている学級も見られました。このように、小学校低学年の学級経営は他の学年と比較してとても難しくより高い技術が必要だと考えられます。そこで長期インターンシップでは小学校低学年を中心とした学級経営の技術も深く学んでいきたいと考えています。

教職大学院では、週間カンファレンスや月間カンファレンス、ラウンドテーブルなど、同じ院生の仲間や先生方など様々な方との交流の場がたくさんあると思います。長期インターンシップで学んだことを一人で振り返るのではなく、多くの人と意見を交換しながら学びを深めていけることができるのはとても恵まれた環境であると思っています。大学に入学してしばらくの間はコロナウイルスの影響で実習などの学びの機会がほとんど得られませんでした。なのでこの機会を生かして、教員としての力を高めながら、研究に励んでいきたいと思っています。インターンシップ配属校の先生方、教職大学院の先生方にはご迷惑をおかけすることがあると思いますが、全力で取り組んでいきたいと思っています。2年間よろしく願いいたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市至民中学校

### 春田 真椰 (はるた まや)

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院に入学しました春田真椰です。所属は授業研究・教職専門性開発コースの授業研究専門性開発アプローチ(4系)です。福井市出身で、昨年度までは福井大学教育学部初等コースに所属し、小学校一種免許、中学校一種免許(理科)、高等学校一種免許(理科)を取得しました。理科での専門分野は地学で、卒業研究では石ころの角ばりや丸みに関しての研究を行ってきました。その影響で丸くてキラキラした石ころが大好きで海などに行ったときに集めています。

現在教員を目指し教職大学院への進学を決めた私ではありますが、正直なところ教員になることにプラスの気持ちを持っていないわけではありません。特にやりたいことや目標もないまま高校生活までを過ごし、福井大学の教育学部への入学を決めた理由は地元だからであり、教員になりたい気持ちはありませんでした。大学1年生の時は新型コロナウイルスの影響で実際に大学に通うこともなかったため、学ぶことに対する意欲がほとんどない生活を送っていました。それでも将来については考えないといけなないと思ひ、大学2年生から就職について考えはじめました。その過程で様々な企業のインターンシップに行くなどしましたがこれを頑張りたいと思える仕事が見つからず、せめてもということでようやく大学にて行っていた理科教育についての学びに力を入れはじめました。すると一つの単元について追究し授業構成を考えていくという授業研究が面白いと感じ、意外にも自分に合っていたのか、頑張ったからなのかは分かりませんが、教員になるのも悪くないのではないかと思うようになりました。そのまま本当に教師になるべきなのか他の職を探すべきなのか分からないままではありますが、教師へのルールに乗った大学生時代を過ごしました。結局のところ私は、流れに身を任せて生きてきた結果教師を目指すことになってしまった『でもしか教師』です。

教師になるのだろうかと思った時、一番初めに考えたことは「教師の役割(学校が社会に求められている役割)」とは何だろうか、ということです。学校は生まれ持った家庭から社会へと生活の場が変化していく過渡期に位置しており、子どもを社会に送り出さなければいけません。このことから教師の役割は、「社会に適応する子どもを育てること」であると考えました。現在の社会には多くの価値観が存在していて、多様性を重視する社会です。子どもたちがそのような社会に出た時に生き生きと自立して生活できるよう教育することが教員の務めであり、そのために物事に対して多様に考えることができる、パターンのではなくて1つ1つ考えて応用できる子どもの育成に力を入れるべきと考えました。教師になるからには授業力を高めたり、日々の関わり方に気を使ったりと様々な努力が必要であると、教師という職業の重みについて教師の役割を考えることから気づきました。

私自身このまま社会に出て子どもを教育するということには自信がなく、また今まで本気で物事に向き合えていなかった自分が教育に向き合うためにも、教職大学院での時間は重要な時間になるだろうと確信しています。インターンシップ生という立場で授業や子どもたちの様子を観察し、授業力や教師として必要な力を自分なりに見極めて高めていきたいです。これからの2年間授業をみることで得られる学びや教科の専門性に関する学び、話し合いを重ねることで得られる学びなど、新鮮な発見をととても楽しみにしています。学ぶからには真剣に学ぶ、教師になると決めたのだから役割を全うできるような教師になるという思いの下、充実した大学院生活に出来るよう精一杯努力します。関わる全ての人からたくさんのことを学ばせて頂きます。これからどうぞよろしくお願い致します。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

### 府川 優美 (ふかわ ゆうみ)

はじめまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、府川優美と申します。昨年度までは、岐阜聖徳学園大学教育学部音楽専修に所属、音楽教育学を専攻していました。現在、小学校一種、中学校一種（音楽）、高等学校一種（音楽）の教員免許を取得しています。

趣味、特技は特にこれといったものがあるわけはありませんが、音楽を聴くこと、テレビ鑑賞、また中学生時代はサッカー部に所属していたので、体を動かすことが好きです。

私が、音楽が好きだと認識したきっかけ、そして教師に憧れをもったきっかけは、小学生のときの恩師の一言です。音楽科の授業中に、恩師が私の姿をみて「府川さんは音楽が大好きなのね。音楽の授業のときは本当に楽しそうにしているわね。」とってくださいました。その一言で、私は、自分は音楽が好きだということに気づきました。そして、それからピアノを高校生まで習い、高校では吹奏楽部に所属し、私なりに音楽と関わり充実した時間を送ってきました。また、恩師の一言は、いま振り返ってみると「自分のことをみてくれていたんだな」という安心、嬉しさがありました。そういった温かさも含めて教師を目指したいと考え、教育学部に進学しました。

ところが、私自身人前に出ることが苦手であったり、自分の考えをうまく言葉にすることができなかつたりすることもあり、本当に教員になれるのか不安になり大学の4年間で教員の道を諦めるか、何度も葛藤しました。それでも、教育実習では、教員の仕事の楽しさを実感しました。教育実習先では、ある子どもが、音楽科の授業が嫌いで、音楽室に入ることも難しい状態でした。なんとか音楽科の授業を楽しんでもらいたいと思い、担任の先生や教科担当の先生のアドバイスもあり最後の音楽科の授業では少しの時間でしたが活動を楽しんでいる姿がみられました。また、「音楽の授業楽しかった」と言ってくれた子どもが多数で、子どもたちと一緒に音楽を楽しむこと、

そして子どもがどうしたら音楽科の授業を楽しむことができるか考えることに、やりがいを感じました。

大学生生活を通してみえた課題は、音楽科は、好きな子どもと苦手意識をもつ子どもと大きく分かれるのではないかと、ということです。私の小学校から高校までの経験では、音楽科の授業に積極的に取り組むことができない級友が多くいました。また、教育実習でもほとんどの子どもは好きな曲があったり、カラオケで歌うことが好きだったり、日常的に音楽と関わり音楽が好きであるにもかかわらず、音楽科の授業となると、積極的に授業に参加しようとしていない子どもが一定数いたのが印象に残っています。その大きな原因は「自信がない」ということでした。特に歌唱や器楽の授業ではテストが行われるため、「うまく歌えない、演奏できない」と思うことが授業に積極的に参加する意欲を低下させているのではないかと推測しました。そこで私は、大学で所属していたゼミで、特に音楽科の授業で、自尊感情、自己有用感を育むためにはどのような活動が可能であるかについて調査し、考察することにしました。いくつかの活動例を調査し、卒業研究としてまとめましたが、あくまでまとめただけであって、実際にその活動が成り立つのかはわかりません。そして、音楽科、あるいはその教科の授業として資質・能力を育成することを前提としながらも自尊感情、自己有用感を育むことは可能なのか、まだまだ課題が多くあります。

大学院では、長期インターンシップを通して、私なりにどう子どもたちと関わったり、授業の中にどんな活動を取り入れたりすることで自尊感情、自己有用感を育むことができるのか、もっと簡単にいえば、苦手意識をもつ子どもでも「楽しい」と思うことができるのか、ということについて学んでいきたいと考えています。長期インターンシップは、その名前の通り長期にわたって子どもと関わりができるので、子どもたちの成長や心境の変化がよくわかると思います。子どもの姿や授業内の活動それぞれに意味付

けをし、次はどうアプローチすればよいか、たくさんの方の意見を吸収し、私自身も常に考えながら子どもと関わっていきたいです。

私は、大学生活で音楽専修にもかかわらず、周りと比較してしまい音楽科の授業に苦手意識をもつこと

も多かったです。そんな私だからこそみえる視点があると思いますし、教員として自信が持てるようにするためにも、この2年間を有意義なものにしていきたいと思います。これからよろしく願いいたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校

### 藤岡 真子 (ふじおか まこ)

初めまして。今年度より福井大学連合教職大学院 授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、藤岡真子です。昨年度までは、富山大学人間発達科学部 学校教育コースに所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種(理科)、高等学校一種(理科)です。

私が教師の道へ進もうと思ったきっかけは、浪人時代にあります。受験を失敗し、何にもとらわれない自分と向き合った中で、学ぶことのワクワク感、楽しさを知ることができました。ワクワクしたことを表に素直に表現し、人と共有し、その中でまたワクワクを見つけたり、自分の中でワクワクを作り変えたりすることがすごく楽しいと感じました。そしてこのワクワクを知る過程を未来ある子どもたちと共有したいと思うようになりました。ワクワクを知る中で、考えたり、判断したり、表現したりします。その過程の中で自分のことを理解したり、可能性を知ったりしていくと思っています。イメージとしては、千手観音のように幾つもの手を生やしていく感じです。教師はその手を一緒に生やすことができる仕事であると思っています。私はそこに魅力を感じています。

学部での4年間では、主に教育の専門的な知識を学びながら、1年次のインターン、2、3、4年次の教育実習を経験しました。その教育実習の経験の中で、心に残った言葉があります。「子どもがぱっと輝く場をつくる」という言葉です。これは、教育実習でお世話になった先生が私にかけてくださった言葉です。

「ぱっと輝く」というのは、どういうことなのか、ま

だまだ「これだ!」という答えを提示することができませんが、子どもの思いを大切に一緒に紐解いていくこと、子どもが感じている学びのワクワクを教師自身が楽しむことが、答えにつながる糸口なのではないかなと、分からないなりに感じています。

大学院では、福井の教育について自分自身が全く触れていないことから、福井の教育について学びたいと思っています。そして GIGA スクール構想により、教育現場に学習用タブレット端末が一人一台配備され、高速ネットワークによるクラウド環境の整備が進んでいます。このことにより、従来の一斉授業型の教師主導型の授業形態から、学習者主体の「課題」「学習方法」を自己選択し、自ら学習を進める授業形態へと転換されるのではないかと考えています。そこで将来学校に勤務し、児童生徒を指導支援する立場になる私は、大学院においてこの教育変革に対応できる自身の資質・能力の向上をまず図りたいと思っています。さらに現場において、DXによる教育改革の分野を推進・牽引することができる研究実践を積み上げたいと思っています。そのために学部での実習や卒業研究を活かし、以下のことについて取り組みたいと考えています。

- ① 端末を使った児童生徒が自己選択できる授業形態の研究
- ② 学習用端末の機能やアプリケーション、思考ツールが、児童生徒の情報の受け取り方や整理の仕方にどのような変化をもたらし、どのような思考の変容があるかについての研究

どこまで大学院において取り組めるのか分かりませんが、配属校の先生方、子どもたち、大学院の先生方、そして学ぶ仲間たちからたくさんのことを吸収しながら、頑張っていきたいと思っています。目に見えていることが全てではないということ、白黒つけ

る見方ではなくグレーな部分で立ち止まりながら物事を見ることを心に留めながら、日々成長できたらなと思っています。2年間、どのような出会いがあるのか、学ぶことのワクワク感、楽しみに出会えるのか大変楽しみです。みなさん、よろしくお願いします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

### 平馬 瑞希 (へいま みずき)

初めまして、今年度から福井大学連合教職大学院に入学しました平馬瑞希です。所属は授業研究・教職専門性開発コース4系です。福井県出身で、昨年度までは福井大学教育学部学校教育課程初等教育コースに所属し、理科を専門として学んできました。小学校一種、中学校一種(理科)、高等学校一種(理科)の3つの免許を取得しました。理科の中でも生物が好きで、得意というわけではありませんが、今は遺伝学を学んでいる途中です。最近は編み物にはまっていて、好きな音楽を聴きながらモチーフ編みを夜な夜な編んでいます。音楽はK-POPや、いろんなバンドの曲を聴いています。中学、高校と部活はしていませんが、小学生の頃から空手を10年間やっていました。

大学4年間の内の3年間では、子どもたちとレクリエーションや大学内を探検しながらゲームを行ったり、遠足では工作を行ったりする、「それいけ!!探険隊」というブロックに所属していました。子どもたちの成長を間近で感じることができ、子どもたちがどうしたら楽しんでくれるのか、それぞれ個性を持った子どもたちへの関わり方など多くのことを経験し学ぶことができました。大学3年のときには、学校インターンシップに参加し、

福井市の中学校で週に1度授業参観をさせていただきました。座学をせず、実験や自己学習に力を入れている先生で、生徒が実験を楽しみにしている姿が見られました。

私が教員を目指したきっかけは、高校のときの生物を担当してくださった先生に憧れ、生物学を学ぶ楽しさを知ったことにあると思います。私は学ぶことが好きなので、教員という学び続けられる職業に魅力を感じ、教育学部に入りました。ですが、教育実習や教員採用試験の勉強中など、本当に教員という職業が私に向いているのか不安になっていきました。そこで、大学院に入り、本当に教員がしたいのか、向いていないとしても頑張れるかということを確認したいと思い、大学院に進学することを決めました。また、4年次の副実習に行った際に、自分の知識量のなさに気付かされ、専門教科である理科をさらに深めていきたいとも思っています。

この2年間で自分がどう成長できるのか、どんな学びが得られるのか、とても楽しみです。教職大学院の先生方やインターンシップでお世話になる先生方から多くのことを吸収し、充実した2年間にしていきたいと思えます。これからよろしくお願いします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/岐阜聖徳学園大学附属小学校

### 干場 千尋 (ほしば ちひろ)

初めまして。福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました、干場千尋と申します。

昨年度までは、岐阜聖徳学園大学教育学部数学専修に所属しておりました。また、小学校教諭一種免許、中学校教諭一種免許(数学)、高等学校教諭一種免許(数学)を所有しております。私は、大学院を修了後、地元である富山県で小学校教員になる予定です。

私は、小学校・中学校在学中の経験がきっかけで、教員になりたいと思うようになりました。私には、学校が楽しくないところ、辛いところだと考えている時期がありました。小学校・中学校の九年間で学校を楽しいと思った時期も、もちろんありました。私は、学校を楽しいと感じた時期と辛いと感じた時期を振り返ってみて、先生の学級づくりの方針、児童・生徒との関わり方など「先生」が大きく関わっていると考えました。子どもたちが、学校を辛い、楽しくないと感じる原因は様々だと思います。加えて、教員の介入が困難な問題など、教員ができることにも限界があるとも考えます。それでも、私のように学校を辛い、楽しくないと感じる子を一人でも減らし、学校を楽しいと感じて欲しいと考え、教員になることを決めました。

私が、大学を卒業してすぐに教員になるのではなく、教職大学院に進学して学びたいと思った理由は二つあります。

一つ目は、子どもたちの自尊感情に焦点を当てて、授業などの実践を行いたいという思いからです。大学時代は、数学専修に所属しておりましたが、教職専修の先生のゼミで、教科を絞らず幅広く教育について学びました。卒業研究では、学習につまずきのある子どもたちの二次障害を防ぐための教育の在り方をテーマにして、学習につまずきのある子どもたちを対象に研究を行いました。私は、卒業研究を通して、子どもたちの自尊感情を低下させないこと、高める

ことにさらに興味が湧きました。先行研究の調査やインタビューだけでなく、学校現場に実際に入り、観察や実践を通して、子どもたちの自尊感情に焦点を当て、学びを深めていきたいなど考えるようになりました。私は、先述の通り、子どもたちに学校を楽しいと感じて欲しいと考えたことが教員になろうと思ったきっかけでした。学校を楽しいと思う要因の一つに子どもたちの自尊感情が関わってくるのではないかと考えます。子どもたちが自尊感情を低くすることなく、学校を楽しいと感じるために、教員としてできることを探っていきたいと考えております。

二つ目は、教職の専門性を高め、教員として自信を持ちたいという思いからです。教育実習の際に、何回か授業をさせていただいたり、子どもたちの様子や先生の仕事というものを間近で見たりすることはできました。しかし、四週間という短い期間の実習で数回授業をして自信をつけることも、年間を通して先生の仕事がどのようなものか知ることもできませんでした。教員として働くことを想像してみると、「自信がないこと」「知らないこと」が多く、不安な気持ちを増幅させていきました。さらに大学の卒業や採用試験が近づくにつれて、教員になりたい気持ちが高まるとともに、教員として働けるのか、仕事をこなせたとして自分が目指す教員像に近づけるのかといった不安が募っていきました。そのような時に、福井大学連合教職大学院が長期インターンシップを通して教職の専門性を高めることができると知り、福井大学連合教職大学院で学びたいと思い進学を決めました。

大学院では、長期インターンシップという貴重な経験を通して、教員としての専門性を高めるとともに、子どもたちの自尊感情を低下させないことに焦点を当てた実践を行っていききたいです。

私は、この二年間を有意義で後悔のない期間にしていきたいと考えております。自分の今までの生活

を振り返ると、言われたことをするばかりで、積極的に物事に取り組んではいなかったと感じています。加えて、学部時代はコロナ禍であったため様々な活動に制限がかけられ思うように動くことができないこともありました。しかし、現在はコロナ禍を抜け、今まであった様々な制限も緩和され、学部時代より柔軟に動くことができ、何かにチャレンジするにはいい機会であると考えております。この機会を無駄

にせず、受け身の姿勢から脱却し、自ら考え行動して、大学院の二年間は意味のあるものだったと思えるように頑張っていきたいです。

至らぬ点が多く、ご迷惑をお掛けしてしまうこともあるかとは思いますが、精一杯頑張りますのでよろしく願いいたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属特別支援学校

### 前川 真慶 (まえがわ まさのり)

初めまして。今年度から福井大学連合教職大学院に入学しました前川真慶です。所属は授業研究・教職専門性開発コースの教職専門性開発アプローチ(2系特支)です。福井市出身で、昨年度までは仁愛大学人間生活学部子ども教育学科に所属し、保幼小それぞれの分野について学んできました。体を動かしたり、読書をしたりすることが趣味で、特に、小・中・高・大学では、それぞれ異なるスポーツを行い、多様な運動経験を積んできました。そのため、運動に関する知識や経験は、誰よりもあると自負しています。最近、ジムに行くことに熱中し、健康的な食習慣や生活リズムなどを意識しています。取得資格・免許は、保育士資格、幼稚園免許一種、小学校免許一種です。

大学では、保幼小のことに焦点を当て、子どもの内面的な変化に関する知識や教師としての授業開発・児童対応技術の習得などに取り組んできました。さらに、私は、算数科のゼミに所属し、私が好きな教科である算数を小学生に対して「算数の授業を行う上で大切なことなにか」、「どのように授業をしていくべきなのか」などを学んでいきました。その学びの集大成として、大学4年次に行った研究テーマは、「知識構成型ジグソー法を用いた算数的な視点・思考力の向上や言語活動を高める授業構成について」です。この研究は、高校での授業研究に参加した際に、取り組まれていた「ジグソー法」という活動に興味・関心を持ったことがきっかけです。私は、「ジグソー法」

を活用していくことで、小学校でより数学的思考力を高めたり、表現力を高めたりすることができると感じ、この研究を行いました。この研究を行った結果、「ジグソー法」は、教師によって適切な単元、教材を準備して行うことで、子どもにとって現代の教育ニーズに沿った学びを構成できることを発見しました。加えて、初めて研究を行う中で、変化の激しい社会の中で、自らが抱える問題に対して、どのように研究・解決していけばよいのかということも学ぶことができました。

しかし、学びが広がり、深まった一方、自らの力不足を実感する出来事が非常に多くありました。例えば、教育実習の際に、特別な配慮が必要な児童と関わる機会がありました。私は、その児童と関わる中で、自らの行動や発言というものが、その児童に対して本当に適切なのか自信を持って行動することができませんでした。この経験から、私自身の実力不足を実感するとともに、子どもの見本となる教師が不安定で自信のない行動をしてはいけないと感じました。このような特別な配慮が必要な児童はこれからも多くなっていくことが予想される中、私は、今以上に専門的な知識・経験を身に付け、自信を持って現場に出たいと考えました。

私が、教職大学院への進学を決めたのは、上記の特別支援教育について学びたいという考えと自らの専

門性や教師としての力量を高めたい、教師としての自信を付けたいという考えからです。この考えを達成するために、1年ごとに目的・目標を立てました。

1年目では、免許取得プログラムで特別支援教育の専門的な知識・技術を身に付けていきたいです。その上で、今までの経験を生かして、現代の「教育ニーズ」や「教育課題」についてカンファレンス等を通して、学びを深め、教育に関する視野を広げていきます。

2年目では、より理論と実践の往還を意識し、長期インターンシップでは、この知識・技術の実践と定着を行いながら、私自身が感じた「疑問」を大切に、その疑問解決を行っていききたいと考えています。

3年目では、自らの学びの集大成として、大学での学びと大学院での学びを融合させ、インクルーシブな教育の実現に向けた授業開発や教師としての実力の向上に努めていきます。

このように、常に目的・目標を明確に意識しながら、失敗を恐れずに挑戦し、自らの力量を高めたり、価値観を広げたりしながら、3年間を通して、自らに自信を持てる教員になれるようにしていきます。最後になりますが、教職大学院の先生方やインターンシップでお世話になる先生方、これから3年間どうぞよろしくをお願いします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市中藤小学校

### 水野 敬太 (みずの けいた)

初めまして。福井大学教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、水野敬太です。

昨年度までは、岐阜聖徳学園大学教育学部数学専修に所属していました。取得免許は、小学校一種、中学校一種（数学）、高等学校一種（数学）です。

私は小学校2年生から大学4年生まで剣道を続けてきました。剣道の理念に「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とありますが、10年以上修練し続けて自分なりにその言葉の意味が見えてきた気がします。剣道の目的は勝つことではなく、稽古のなかで心身を鍛錬することによって、身体・心・精神を養うことができます。その他には、文武両道の精神や、集中力、決断力、相手を敬い、礼儀を重んじることなどが養われたと感じます。

剣道の他に力を入れたことは数学です。高校は北陸高等学校のスポーツ特進で当時はまだ理文選択がなく、文系でした。その中でも、大学では数学と教育学を中心に学びたいと希望し、数学専修に入りました。高校時代に数Ⅲを履修していなかったこととコロナの影響で大学最初の1年間は全てオンラインで

あったこともあり、大学数学を勉強するのに大変苦労しました。しかし、この経験から勉強がまったくわからない気持ちを知ることができました。数学は積み上げの部分が大きいので戻って用語の定義や既習の定理をおさえ、その中でもわからないものを友人や教授に質問するようにしていました。振り返ってみると周りの方々に支えられてばかりだったと思います。

私が教員を強く志望するようになったのは、中学校での教育実習です。その中学校は学びの共同体を実践されていました。生徒が学び合うための課題設定や対話的な活動の在り方などの授業をデザインしていくことが楽しかったです。ジャンプ問題は、一人では難しいが協働することでできるような問題にするため、アイデアが浮かばない時もありました。しかし、日常で使えそうだと思ったものを題材にしたところ、実際の授業では生徒の反応がよく、教材研究をしたり、先生方に教えていただいたりした価値があったと思えました。この経験から、児童・生徒と一緒に学ぶこと、専門的知識を実践で活かすことの楽しさを実感しました。専門性、学問以外の分野でも幅広く

く学び続け、子どもの学びの伴走者となる教員になりたいと思っています。

長期インターンシップでの目標は、主体的・対話的で深い学びにつながる授業づくりができるようになることです。長期インターンシップを通して私自身の専門性を高めていきたいと思っています。また、並行して、現場での経験を活かして、生徒指導力や教師の集

団としての動きについて学んでいきたいと思っています。長期インターンシップだけでなく、カンファレンスやラウンドテーブルなどで様々な方の意見や考え方を吸収していきたいです。このような実践的な学びと大学院での理論の往還を大切に、学びを自分のものとして身に付けたいです。これから2年間よろしくをお願いします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井大学教育学部附属義務教育学校後期課程

### 山崎 真純 (やまざき ますみ)

はじめまして。今年度、福井大学連合教職大学院授業研究・教職専門性開発コースに入学しました、山崎真純と申します。免許取得プログラムで中高理科の免許を取得したいと考えています。出身大学は仁愛大学子ども教育学科で、保育士資格、幼稚園(一種)、小学校(一種)の1資格2免許を取得しました。大学卒業後は一般企業で2年間勤務しましたが、今年1月末で退職して現在に至ります。

私は小学生の頃から理科が好きでしたが、中学、高校と段階が上がっていくにつれて内容を難しく感じるが増えていきました。特に高校では成績が上がらず悩んだこともあります。それでも理科が好きという思いが残っているのは、幼少期に姉が学校で習った理科の内容を家で再現して見せてくれたからです。夜に玄関先やベランダから星座を観察してみたり、アサガオやヘチマを育ててみたりしていました。特に覚えているのが虫眼鏡で枯葉を焦がす遊びです。今思うと子どもがするには危ない遊びですが、コンロやライターでつけた火しか知らなかった私にはとてもおもしろい現象でした。理科との出会いは楽しい思い出であり、そうした経験をさせてくれた姉にはとても感謝しています。

大学時代は理科教育の研究室に所属し、アブラミミズという生き物の研究をしていました。ミミズとはいっても土の中や道端にいるミミズとは違い、体

長が数ミリ程の小さな水生ミミズです。顕微鏡で観察すると体から生えている剛毛束がしなやかで、水の中を移動する様子はクラゲのように優雅で美しいです。生き物であるため思うように研究が進められないことも多かったですが、予想していなかったことが起こったり、今まで明らかになっていなかったことが分かったりするおもしろさを感じました。

大学卒業後に企業に就職した理由としては、教育現場だけでなく一般企業で働く経験もしてみたいと思ったからです。子どもの頃から「会社員ってどんなことをしているのだろう」と疑問に思っていました。パソコンをカタカタしているイメージはあれども、具体的に何をしているのか不思議でした。会社員として働いている家族に聞いても納得できず、自分で経験してみることにしました。就職した企業では主に経理を担当させていただき、その他にも労務・庶務や採用業務も兼務していました。全くの未経験で資格もスキルもない状態にもかかわらず、社内のいろんな業務に関わらせていただきました。会社員としていろんなことを経験してみたいと思っていた私にとって、とてもありがたい環境でした。

会社員はどんなことをしているのか気になっていた理由は、私にとって一番身近で働いている姿を見られる職業が教師だったからです。小学校に入学してから高校を卒業するまでほとんど毎日関わる(家

族以外の) 社会人は教師で、当たり前のように身近に存在する職業でした。自然と「私が先生だったらどうするだろう・・・」と自分が教師になっている姿を想像するようになっていき、大学は教員免許を取得できるところがいいと思うようになりました。

しかし正直なところ、私は勉強がものすごく得意というわけではありません。周りの同級生たちよりも授業の内容を理解するのに時間がかかります。「教師を目指すのに勉強が得意ではないのは致命的なのでは？」とも思いましたが、むしろそこが強みになると思います。大学生の頃に塾講師として中学生と関わっていたとき、テキストの内容がなかなか理解で

きず苦しんでいる生徒に出会いました。勉強が得意ではなかった私にはその生徒の気持ちがよく分かりました。だからこそ生徒への伝え方を工夫したいし、「分からない」という気持ちに寄り添いたいと思います。

大学院ではより専門性を高めていくため、私自身も「分からない」や「どうして？」と思うことの連続ではないかと予想しています。その過程にある苦しさや理解できたときの嬉しさ、そして学問そのもののおもしろさを大切に感じ取っていきたいです。これからよろしくお願いたします。

## 授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市湊小学校

### 山本 実侑 (やまもと みゆ)

はじめまして。今年度より授業研究・教職専門性開発コースに入学いたしました山本実侑と申します。所属は、授業研究・教職専門性開発コース(4系)になります。昨年度までは、福井大学教育学部初等教育コースに所属しておりました。取得免許は、小学校1種、中学校1種(英語)、高等学校1種(英語)です。

大学では英語科に所属し、模擬授業や主免教育実習及び副免教育実習を通して、一教員として英語を教えるという立場を経験しました。元々、高校時代は国際科に所属しており、日常的に英語に触れること、そして英語を話すことが多くありました。以前から子どもと関わることが好きだということ、そして英語を学ぶことが低学年化しているという中で、子どもたちにとって英語を学ぶ際、どのような力が必要なのかを学びたいと感じ、教育学部の道へ進みました。高校時代にはコミュニケーションをとるという目線から見ていた英語を、大学時代は専門的な目線から英語を捉えることができました。

また、学部生時代に力を入れていたことは、外国にルーツをもつ子どもたちへ行う学習支援です。大学入学以前より、外国にルーツをもつ子どもたちと関わることに興味があり、ようやく授業に余裕が出てきた大学3年次より、学習支援への参加を始めました。学習支援に参加したことで、改めて見えてきたことの一つとして、日常会話を堪能に話す子どもであったとしても、学習面になるとなかなか持っている力を発揮することができていないということでした。学習支援の中で、子どもたちの宿題を見ている際に、漢字や擬音等の表現、また文章問題の答え方に行き詰まっている場面が多く見受けられました。生活言語の面では問題がないように見えていたとしても、学習言語の面から捉えると子どもの抱える新たな問題が見えてきました。つまり、表面的に見てどれほど上手く日本語を話せていたとしても、それに隠れてしまい、抱えている困難が見えにくいということが、学習支援に参加したことで明らかになりました。

この興味に基づき、卒業研究でも引き続き外国にルーツをもつ子どもたちへの支援という観点から研

究を行いました。大学3年次から参加していた支援の積み重ねを踏まえて、改めて外国にルーツをもつ子どもたちが求めている支援とはなにかと考えました。その結果、果たして彼ら彼女らに求められているものは、日本語指導に重点が置かれたものだろうか、というリサーチクエスチョンに至りました。約一年間の研究を踏まえて、もちろん日本語に関する指導は必要不可欠なものの一つではありますが、言語を理解することが出来れば、解決する問題ばかりではないと明らかになりました。異文化の中で生活し、多くの「出来ない」「分からない」に直面している子どもたちの、「出来る」や「分かる」を認め、伸ばしていく姿勢が支援者にとって求められるのではないかという考えに至りました。

本大学院の長期インターンシップの制度を活用し、学校現場で長期的な目線をもって外国人児童生徒等と関わりをもちたいと考えております。今までは学

習支援者という立場からのみ、外国人児童生徒等を捉えていました。しかし、一週間に一度の比較的短時間である学習支援の中では、関わる児童生徒等の限られた部分しか見取ることができませんでした。そのため、インターンシップという長期的な目線で外国人児童生徒等と関わりをもてることにより、学習支援よりも学校へと入り込み、広い視野から子どもたちを捉えることが可能となります。在籍している二年間で、先生方から助言をいただき、様々な意見や考えを吸収しながら、自分の学びを更に深めてまいりたいと考えております。

インターン配属校の先生方及び教職大学院の先生方には、不慣れな点も多くご迷惑をおかけすることもあると思いますが、自分のやりたいことへと向かって勉学に励み、二年間精一杯努めてまいります。これからどうぞよろしくお願いいたします。



## 開講式

2024年4月6日(土)13時より、令和6年度福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科(以下、教職大学院)の開講式が行われました。

昨年に引き続き、対面とオンラインを併用した開催でしたが、東京サテライト、岐阜聖徳学園大学や富山国際大学の院生・スタッフも大勢福井に来られて対面で参加するなど、和やかで活気のある開講式となりました。

今年度の新入学生は、授業研究・教職専門性開発コースが18名、ミドルリーダー養成コースが13名、学校改革マネジメントコースが35名の計66名を迎えることになりました。

開講式では、木村研究科長のあいさつ、岸野副研究科長のオリエンテーションに続き、最初のグループセッションが開かれました。グループセッションでは、教職大学院の年間の学びのサイクル、記録を大切にしたい学びの展開、カンファレンスの意義などについて、それぞれの期待や不安を共有しながら、じっくり話し合いました。

これから教職大学院の新たな1年が始まります。あらためて新入学の院生の皆さん、ご入学おめでとうございます。実りある大学院生活になりますよう、心よりお祈り申し上げます。また、在籍生におかれましても、この一年が更なる学びの機会になりますことを祈念しております。





## 令和5年度 長期実践研究報告 作成一覧

令和5年度の修了生が作成した、長期実践研究報告の一覧です。

号	氏名	タイトル サブタイトル
授業研究・教職専門性開発コース		
570	魚見 晏那	"Im_"を捉え直す
572	大畑 颯人	子どもとともにつくる「探究」をめざして “探究”と“子どもの思い”の間で揺れ動く教師の“葛藤”
574	加福 智哉	見て学び実践して学ぶ 福井大学教育学部義務教育学校で学ぶ2年間
579	小林 歩実	手仕事で培われるアイデンティティ 試行錯誤し遠回りすることの重要性
586	多田 朋生	経験の中で変化するもの 教職大学院での学びを通して
589	富田 一葵	10年後の私へ 実践からの理想の教員を目指して
592	中村 七海	インクルーシブのその先にある学級の形 学級経営に関わる指導場面の分析を通して
596	原 智徳	ものづくりは人づくり 当たり前前の進化を目指す
602	松浦 妃南	授業観の形成の過程をたどる 見取る力と数学の授業観に焦点を当てて
612	八十川 竜馬	エージェンシーの窓から自分を見つめ直す
ミドルリーダー養成コース		
563	ANUNIWAT DHANACHAT	A Collective Learning from Reflective Practice through the Process of Inquiries 探究過程を通じた省察の実践からの集学的学び
566	稲川 理子	「自走する子」を育てるために 教師の適切な支援・介入の模索
567	今井 悠介	探究的な学びをデザインするのは誰だ 未来を創る子どもたちに私たちができること
575	河合 創	コミュニケーションの場を創る 「問い」をもとに、実践を省察する
578	小泉 真由子	つながりを求めて ありのままの自分として生きること
587	千葉 美奈子	帰国子女の教師として本来の教育の在るべき姿を探る 生徒・教師との関わりを通して
588	辻岡 美希	教師であること、私であること 「ともにあること」を土台に据えた組織文化を形成するために
593	Nathaniel Venezuela Teocson	Being Smart and Wise Innovation and Inspiration through Reflection and Observation
594	布目 康裕	発信から拓く子供の学び 他者との対話を通して
600	藤森 香織	子どもが主役！ 子どもとともに学び続ける教師を目指して
605	水谷 雅典	資質・能力の育成を中核とした授業改革と学校の発展 探究的な学びに注目して

号	氏名	タイトル サブタイトル
ミドルリーダー養成コース		
610	村橋 義人	振り返ることで気付く認め合う大切さ 保育を捉え返し、子どもと大人の姿が重なる
613	矢成 清美	豊かなコミュニケーションでみんなをつなぐ 支え合い、関わり合って、歩み続ける教師
615	横田 和也	社会につなげる教育への挑戦 民主的でウェルビーイングな社会の実現をめざして
学校改革マネジメントコース		
562	青山 憲枝	小さな渦が大きくなうねりに 「普通」を疑うという自分の意識改革から始まる組織改革
564	一瀬 憲幸	時代が変わり続けても 緩やかにつながり合えるコミュニティを目指して 協働と連携、誰にとっても今より素敵な未来の社会構築の一端を担うために
565	伊藤 貴子	エージェンシーを育む学校の創生 高校改革の協働探究を通して
568	岩佐 麻衣子	つながって 学ぶ楽しさを たき火に火を点けるのは、誰？
569	岩本 守聰	学校の魅力化と多忙化解消の実践 「探究」を軸にした教育コミュニティの可能性
571	大橋 圭子	協働できるコミュニティをめざして 「ねばならない」からの脱却
573	笠松 政世	変わる教師・変わる子ども・変わる学校 SHIN化プロジェクト～なりたい自分になる～
576	川崎 多花子	協働で学ぶ学校組織 子ども達の笑顔を求めて
577	黒田 佳昌	同僚性を育み、協働を通して教職の魅力を感じられる学校づくり 生徒が主語の学校づくりを目指して
580	酒井 範子	強みを活かす学校になる 同僚性を高めながら成長していくコミュニティを目指して
581	島田 直子	コミュニティを「拓く」から「支える」へ 学び続けることで変わる価値
582	鈴木 聡史	問うて語りうるコミュニティとは 実践と省察を繰り返す探究のサイクルによって得られた示唆
583	砂川 誠	協働する学校組織づくりへの挑戦 宮古島の「学びの種」を大切に
584	高橋 和代	「チームとしての学校」を実現するための学校組織づくり
585	高橋 正晃	協働的な学びをめざして 「過去」から「現在」そして「未来」へとつながる子供の学び・教師の学び
590	中今 純一	学校らしくない学校の挑戦 ありのままの君を受け入れる新たな形の追求
591	中野 麻委	有機的な学び合いの先に見えるもの 副校長による、校内研究に関する一考察
595	秦 計代	未来につながる力の育成を目指して

号	氏名	タイトル サブタイトル
学校改革マネジメントコース		
597	日芳 浩介	子どもが主役の学校づくり 協働する組織へ、つなぐリーダーの役割
598	廣澤 喜教	教師の学びを日常化する 「授業づくり」と「総合的な学習のカリキュラムマネジメント」の長期実践をもとに
599	福嶋 大晃	地域とともにある学校 「したい！」を実現できる生徒を育てたい
601	巻下 健太郎	新しい同僚としての可能性を求めて 創発を誘う関係性を視座として
603	丸山 高弘	学びが楽しい 仲間との時間が楽しい 学校を創る つながりが楽しさを生み出す
604	水澤 紀子	つながる、広げる ゆっくり、じんわり
606	水野 涼子	気づきを、動きへ つながり・語り合いを通じた学校改革へのプロセス
607	宮谷 郁江	学び続ける教師を目指した校内におけるコミュニティの在り方を探る 実践コミュニティづくりの挑戦を通して
608	武藤 基彦	子どもも教員も学び合おうとする学校づくり コミュニティづくりの省察的な実践を通して
609	村地 和代	受容から協同、そして協働へ 「幼保小の架け橋プログラム事業」2年目までを振り返って
611	本村 税	協働するしなやかな組織づくりの連鎖を目指して 「チーム学校」の構築に向けた教職員研修の改革
614	山本 亮二	協働による新しい学校づくり 学び合い、学び続ける子ども・教職員集団を目指して
616	吉岡 高成	学校の内でのつながりと外とのつながり 繋がりを意識した学校



## 公開研究会 等

# 6月14日(金)

## 福井大学教育学部附属幼稚園・義務教育学校 令和6年度 教育研究集会 (第1次案内)



**幼稚園 研究主題 (第Ⅲ期)**  
**「つながりが育む学びの深まり」**  
幼稚園 研究副題 (3年次)  
「好きが広がり、世界をひらく」

**義務教育学校 研究主題 (第Ⅱ期)**  
**「探究し協創するコミュニティ」**  
義務教育学校 研究副題(1年次)  
「共に学びを拓くカリキュラムを創る」



## 授業公開

幼稚園での遊びや各教科の探究的な学びを公開します。  
子供の学びについて共に語り合しましょう。



幼稚園の遊び



各教科の探究的な学び



## シンポジウム



学習院大学 秋田 喜代美 氏



慶應義塾大学 鹿毛 雅治 氏

学習院大学教授 秋田喜代美氏、慶應義塾大学教授 鹿毛雅治氏に  
シンポジストとしてお越しいたします。  
詳細は、4月下旬発送予定の第2次案内にてお伝えします。

- 幼稚園・義務教育との接続に興味がある方
- 授業実践を語り合い、教育全般および専門教科の実践力を高めたい方
- プロジェクト型学習や探究的な学びに興味・関心がある方
- 近年の教育改革などの教育情勢の動向について興味・関心がある方

是非ご参加ください

### 所在地

福井大学教育学部附属幼稚園  
福井大学教育学部附属義務教育学校  
〒910-0015  
福井県福井市二の宮4丁目45番1号  
TEL:0776(22)6687【幼稚園】  
:0776(22)6891【前期課程】  
:0776(22)6985【後期課程】

会場までのアクセスは  
右記のQRコード、もし  
くは、下記のURLより  
接続される本校HPにて  
ご確認ください。



<http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-g/>

### お問い合わせ先

福井大学教育学部附属義務教育学校 担当：森川

Tel 0776-22-6985 /Fax 0776-22-6703 Email : molmol3@u-fukui.ac.jp

## Schedule

- 4/20,21 Sat. Sun. 月間カンファレンス A 日程
- 4/27,28 Sat. Sun. 同 B 日程
- 5/14 Tue. 運営協議会(オンライン)
- 5/18 Sat. 月間カンファレンス A 日程
- 5/25 Sat. 同 B 日程
- 7/6,7 Sat. Sun. 実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions



昨年度も多くの修了生の皆様にご協力をいただきました。今年度も気軽に投稿いただけますと幸いです！

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。  
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。  
関心がある方は、dpdtfukui\_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】 本号では、授業研究・教職専門性開発コースの院生からの熱い抱負が述べられています。また、新任スタッフからも、教育者として新たな気持ちで学び続ける思いを届けていただきました。2024 年度は、教職大学院がどのようなコミュニティとなって発展していくのでしょうか。本当に楽しみです。巻頭言では、松木副学長より「教師とはいかなる専門職か」について執筆していただき、改めて多くのことを学ばせていただきました。今後、福井大学においても発信力を大切にしながら、読み手の皆様と共によい Newsletter を作っていきたいと思います。(Newsletter 担当)

教職大学院 Newsletter No. 182

2024. 5. 17 公開版発行

編集・発行・印刷  
福井大学大学院 福井大学・  
岐阜聖徳学園大学・富山国際大学  
連合教職開発研究科  
教職大学院 Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京 3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp